聖刻1092
ストーリー・ダイジェスト
～第一部聖都編～

フェンの住む村は収穫祭の夜、突然操兵集団に襲われ、彼の幼なじみの少女リムリアが連れ去られた。彼は、父の形見の狩猟機ニキ・ヴァシュマールを駆って単身彼女を探す旅にでることになる。旅先でフェンは占い師の少女ジュレ、銀色の狩猟機で旅をする騎士クリシュナと一緒になるが、途中、練法師バルサの襲撃に遭い、強風によって吹き飛ばされ二人とはぐれてしまう……。

"風の巣"を越えようとしたフェンたちの前に、呪操兵を操る火の門のバルサが立ちふさがった

ドウシャの町で出会った少女ジュレ・ミィは、フェンの運命を占おうとするが……

リムリアは収穫祭で干し肉を買い、謹慎中のフェンに会いにいく

すべての陰謀の本拠地であるウルオゴナのデュラハーンを目指すフェンとガルン。潜入した聖刻教の教会で、フェンはリムリアと再会を果たすが、練法師カルラの罠には まってしまう。二人は、ヴァシュマールの仮面と聖剣の力によってなんとか危機を脱し、フェンはヴァシュマールの真の役割の一端を知る。一方、クリシュナは、ジュレを連れて故郷に戻り、祖国ダマスタに攻め入ろうとしているウルオゴナの侵攻に備えて、ダマスタ軍に参加していた……。

ダマスタ先遣軍の出立に町はわきたつ。中でも目をひいたのは、銀の狩猟機アビ・ルーバだ

カッチャナラを下山したフェンとガルンは一時の休息をとる

アラクシャーについたリムリアの前にゾマが現れた

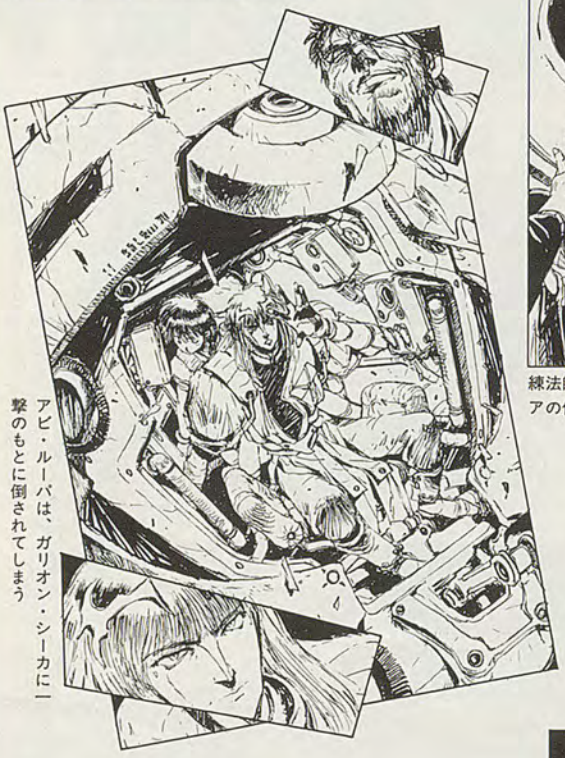
WARES STORY DIGEST

フェンとガルンはウルオゴナから連れ去られたリムリアを追って、滅亡した旧ホータンの聖都アラクシャーを目指した。リムリアがホータン王朝唯一の継承者であるという事実に、フェンは少なからず動揺するが、彼女を救い出したいという気持ちに変わりはなかった。リムリアの戴冠式の前日、王城に潜入した二人は、練法師たちに戦いを挑む。その頃リムリアは、ゾマとカルラによって精神改造を受けていた……。

ヴァシュマールの三節棍が、相手の後頭部を強打する

ガルンはフェンと別れ、クーニアとともに暮らすことにした

練法師の呪文の詠唱とともに、リムリアの体が持ち上がっていく



アビ・ルーバは、ガリオン・シーカに一撃のもとに倒されてしまう

ゾマの仮面がはずれると、そこにはフェンの父親にそっくりな顔があった

ラバザーナでの戦いで絶体絶命の危機にあったクリシュナは、フェンの友人イル・カタムの援護で九死に一生を得たが、作戦の失敗によって軍に合流できなくなり、イルが話を持ちかけてきた義勇軍へ参加することになる。その頃フェンは、練法師ガルダを倒し、ついにゾマとの因縁の対決を迎えていた。真の力を発揮するための〈真・聖刻〉を持たないヴァシュマールは窮地におちいるが、遠くはなれた地からフェンを支えるジュレの意識に励まされ、なんとかゾマを倒すことができた。しかし、そのフェンの前にダム・ダーラと〈黒き操兵〉ハイダル・アナンガが現れる……。

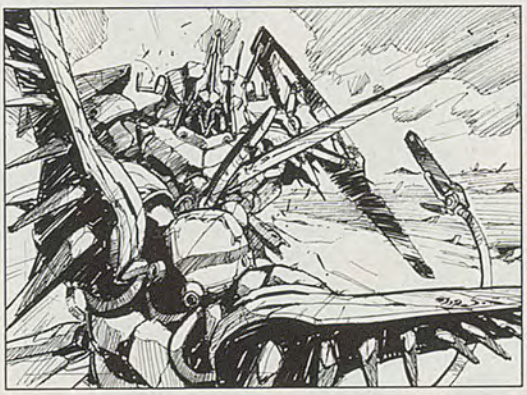
激しい気合いとともにヴァシュマールから放たれた気が、ガルダの乗る呪操兵を打ち砕く

フェンたちの前に出現した操兵こそ、黒き操兵ハイダル・アナンガだった

ダム・ダーラと対峙したフェンは、目前でリムリアとガルンを殺された怒りに我を忘れ、ダム・ダーラの思惑どおりに〈選ばれし者〉のも、つ真の力を解放してしまう。しかし、ヴァシュマールごとハイダルの触手に貫かれて殺されてしまい、世界は〈黒き聖刻〉による支配へと傾き始めた。だが、ここまでの経過を悲痛な思いで見ていたラマス教のハラハと大僧正ルミアは行動を開始。また、最愛のゾマを倒されたカルラも、〈白き操兵〉に仕える〈千の守護者〉の要請で、ゾマの精神回復への鍵であるリムリアとガルンを蘇らせる……。

リアを殺され、憎悪と闘争
発させるフェン

フェンを介して結ばれていたクリシュナとガルンは、堅い握手を交わした



アルバから死と狂気を吸収したハイダルは、咆哮をあげてヴァシュマールへ向かった

消えた黒き操兵を探し求める新しき旅が、今始まろうとしていた

アビ・ルーバに向けて、ガリオン・シーカの大鎌の刃が迫った

ダム・ダーラは聖剣エル・ミュートを抑えてヴァシュマールをも〈黒〉に染め始めていた。八つ存在していた聖刻における〈白〉と〈黒〉の均衡は破れ、黒き波動が世界を浸食し始める。だが、ルミアの力を借りたリムリアはフェンの復活を図った。その際に〈真・聖刻〉が発した光によって、ダム・ダーラは乗り移っていたゾマの身体から分離し、ハイダルは逃げ去った。一方、ガルンとクリシュナは、〈千の守護者〉の殺戮を止めるべく彼らとの戦闘に突入していたが、圧倒的な力の差に苦戦していた。そこへフェンとヴァシュマールが現れ、呼び寄せられるようにハイダル・アナンガも出現、〈白き操兵〉と〈黒き操兵〉の宿命の戦いが開始された……。

WARES STORY DIGEST

～外伝編～

【旋風の章】

ナシュワの激しい攻めにフェンは何度も倒れたが、そのつど立ち上がった

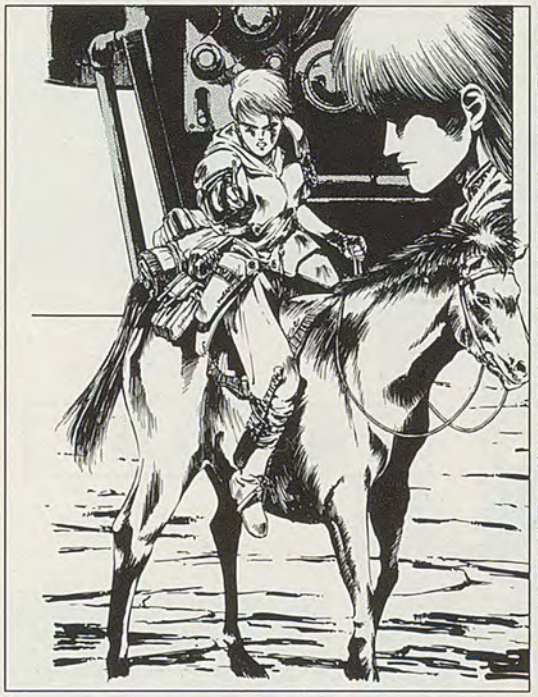
カロウナの村は明後日の収穫祭を控え、気の早い行商人たちが通りに露店を広げていた

フェンはガウ師兄を前に、子供のように目を輝かせて拳を構えた

収穫祭の前日、カロウナの村が〈紫巾党〉を名乗る賊に襲われた。フェンの操兵を狙った党主ナシュワの陰謀だった。リムリアを人質に取られたフェンは単身敵地に乗り込む（……旋風の章）。

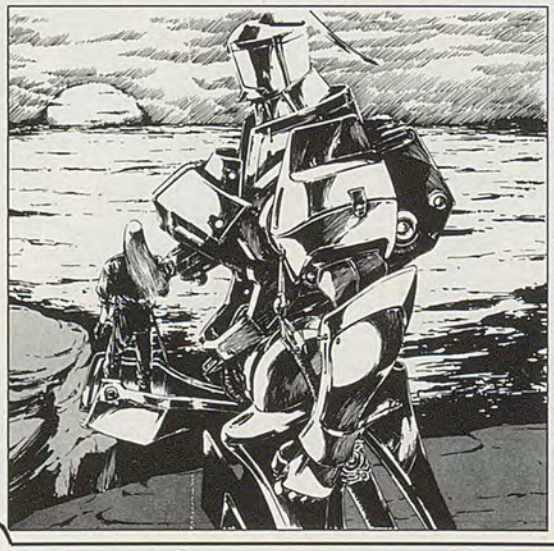
祖父の裏工作を恥じ、騎士任官の翌日に武者修行の旅に出たクリシュナ。しかし、彼との再試合を望む女騎士スクナが練法師に利用され、彼は望まぬ操兵闘技大会に出ることになる（……銀の章）。

養母と喧嘩し家出したところを人買いに捕らえられたジュレ。同じ境遇の少女とともに脱走を図る（……童女の章）。



スクナと呼ばれた女騎士は、瞳に炎を宿らせたかのような激しい眼光を向けた

【銀の章】



クリシュナはアビ・ルーバに乗り込むと新たな旅へと出発した

シャルバーンの新たなる腕が、地に刺した剣の柄をがっちりつかんだ

二本角が凄じい気合いとともに刀を一閃すると、敵武者が脳天から幹竹割りにされた

ジュレを始めとして数人の女の子が、二人一組で鎖につながれていた

ガルンとムゾレの二人は、鼻先をつきつけるような距離で視線を交わらせた

【騎士の章】

《赤龍の爪》大隊はパーソル地方のクフィル山を目指して行軍していた

【童女の章】

ジュレの養母マサリエは、優しい表情でジュレをぎゅっと抱きしめた

そこには部隊の行く手を阻むように、山の頂から麓に向かって川が走っていた

イネスの顔にかげりが差し、二つの瞳に涙が浮かんできた

WARE STORY DIGEST

バラーハを突き飛ばしたガザインの脇腹に、従兵機の斧槍が深く突き刺さった

〈赤龍の爪〉の力を持ってしても砦を陥落することは容易ではなかった

ムゾレの狩猟機が部下の従兵機から弓矢を受け取り、対岸の木めがけて矢を打ち込もうと構えた

一本角の狩猟機、イオニ・ガザインは敵操兵の首を一刀のもとに斬り落とした

ガルンたちの奇襲によって砦は混乱し、騎士団本体も一気に突入しだした

満天の星のきらめきを背に、漆黒の物体が虚空に浮かんでいた。それは人だった

死操兵は腰をかがめ、左腕をゾマに向かって伸ばし始めた

抱きかかえられていたカルラは、ゾマの目を無意識に覗き込んだ

【紫電の章】

東方動乱の四年後、亡国の民たちが起こしたパーソル地域の反乱を鎮圧すべく、ガルンの所属する聖刻騎士団・南部方面軍が派遣された。ところが進軍中、同じ小隊にいた親友ヨハルから自分を暗殺する企てがあるらしいとガルンは聞かされ、それを裏付ける事件が次々と発生する（……騎士の章）。

大師の命により古代の都ビョルンへ向かったゾマ。〈月〉の練法師カルラと共に探索を進めるうちに、いつしか二人の間に心の交流が生まれる（……紫電の章）。

聖刻 1092

ストーリー・ダイジェスト

～第二部東方編～

しんがりにいたヴァシュマールの体から、いきなり白煙が噴き上がった

傭兵たちの中傷に、ジュレは大見栄を切ってやりかえした

テラは懐から手巾を出すと、赤い血のにじむゾマの傷を包んだ

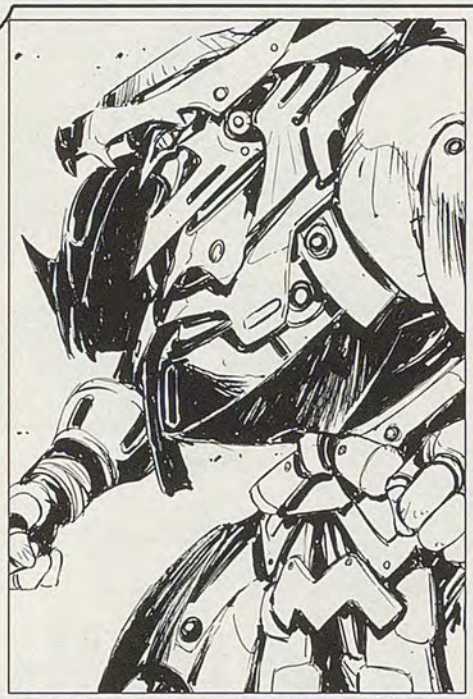
フェンたちは〈東方動乱〉によって東方を追われシンに逃げのびてきた練法師たちの隠れ里を発見した。彼らは

〈黒き操兵〉との戦いから四ヵ月。フェン、クリシュナ、ガルン、ジュレの四人は新たな〈黒〉の操兵を求めて東方を目指し、隊商の用心棒をしながらシン国内を旅していた。だが、シン軍の後方攪乱を狙って教会より送り込まれた練法師にそそのかされたダン・ギル率いる操兵盗賊集団が隊商を襲い、フェンたちを挑発してきた。リムリアと別れて気が弛み戦いの勘を忘れかけていたフェンは彼らに翻弄されるが、クリシュナたちは彼を立ち直らせようと一人で敵のもとに送り出す。

ジュレを人質に取られ、フェンは抵抗することができなかった

土煙が収まると、そこには三日月を背負った奇怪な操兵が立っていた

WARE STORY DIGEST



バイロンは刀を振りかぶり、地響きを轟かせて躍りかかった

ジュレは袋をフェンに押しつけると、地面に置いた新しい袋を拾いあげた

フェンは臆することなく、そのままヴァシュマールの肩にひらりと飛び乗った

フェンたちは〈東方動乱〉によって東方を追われシンに逃げのびてきた練法師たちの隠れ里を発見する。彼らは〈黒の四〉の封印・漆黒の錫杖を守る一族であった。だが、下界から来た謎の練法師に扇動された若者たちがそれを奪い、里を離れてしまったという。〈黒の四〉という言葉に戦慄する一行。一方、聖刻教会の教都ワースランでは法王より〈白き操兵〉討伐の勅命を受けたクランド家の討伐軍が、若き当主ラマール・クランドの指揮のもと、フェンたちを目指して出陣していた。

四本の剣の切っ先が、暴走したヴァシュマールの頭目がけて突進した

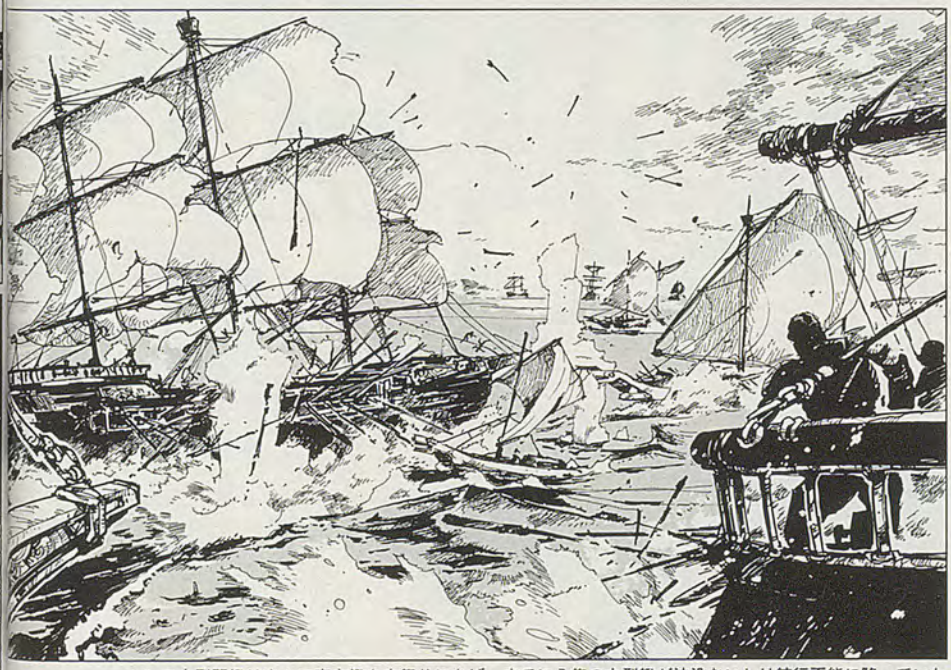
ヴァシュマールの三節棍が、群がり迫る東方操兵を次々に打ち倒していく

ヴァシュマールとバラーハは、同時に水面に身を投げた

跳ね橋が降りるように船首が傾き、厚い鎧をまとった丸い頭の巨人が躍り出た

アビ・ルーパは、クリシュナとジュレを乗せたまま川底に沈んでいった

ついに東アグ河を挟んでハムル地方奪還を目指す東方南部域連合軍とシン国軍との戦闘の火蓋がきって落とされた。その隙をついて東方に潜入したフェンたちだが、練法師団の刺客や、さらにフェン一行にかけられた賞金に群がる傭兵たちの度重なる襲撃を受け、その行く手を塞がれてしまう。その頃、クリシュナに深い恨みを抱く練法師ダロトは、彼に復讐を果たさんと着々とその準備を整えつつあった。



シンの中型闘艦は次々に東方艦を血祭りにあげ、すでに八隻の大型艦が沈没ないしは航行不能に陥っていた

ジャラン操るハイアーンの怒濤のごとき攻勢にに、ガルンは防戦一方となった

ヴァシュマールの長盾によって巻きあげられた風は、竜巻となって迫りくる火球を吹き飛ばした

WARES STORY DIGEST

湯船に浸かったフェンは、気分がよさそうに唸り声をあげた

頭に閃光が走り、ラマールの意識は瞬時に肉体を離れ、別の「器」に移った

ワルサの合図とともに、千名の騎士は一斉に腰の太刀を抜き放ち、高々と掲げた

テラが戻り食事の支度にかかると、匂いにつられたのか奥からラーバティが出てきた

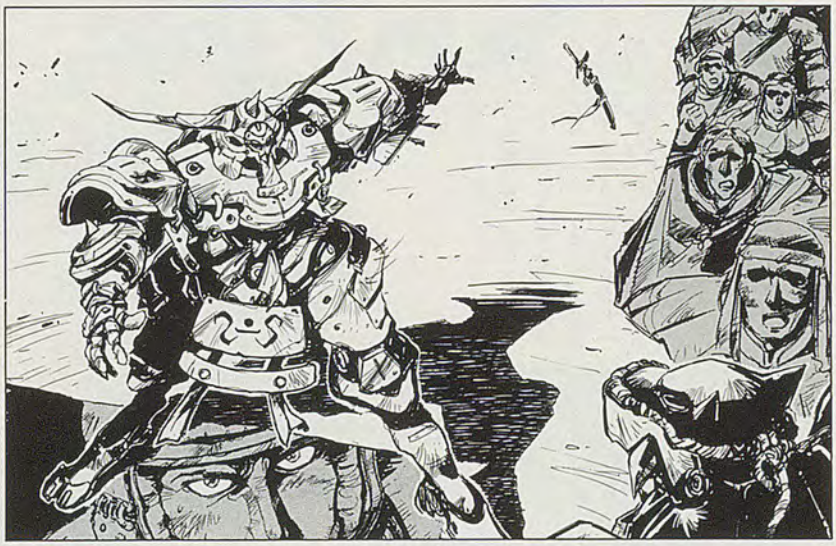
かつての友ムゾレの操るラサー・ナヴァルカと、ガルンのバラーハは剣を交えた

ラマールを総大将に戴く法王勅命軍は、東方最大の商業都市ヴィシャームへ辿り着いていた。そこで現地の騎士団員にからまれているガルンの妹、イネス・ストラを助けるラマール。だが、勅命軍を監視するために参謀として送り込まれたイライザ・ザトウクの策略により、全軍の前で果たし合いを目的とした操兵戦を赤鳳騎士団の騎士たちに挑まれる。一方、南部域に入ったフェン一行は、隣国へ抜ける廃都の中で、ガルンのかつての仲間である赤龍騎士団の騎士たちに待ち伏せを受けた。

先代団将の絵画の下の机では、ガルンの父であり現団将でもあるジャン・ストラが書類に目を通していた

腰に様々な工具を差した革帯を巻いているいかつい顔をした男がガルンに声をかけた

イスルギーンは、ワルサの試合の経過をガルンに解説した



バラーハは小刀を鞘ごと外し、それを遠くに投げ捨てた

赤龍騎士団の包囲網から逃れたフェン一行は、呪われたカデスの地でつかの間の休息をとる。そこへ、ガルンの旧友ムゾレとデウスが訪れ、フェン一行はラマール率いる勅命軍の動きを知らされる。その隊列にはかつてガルンと共に激しく〈聖四天王戦〉を戦った二人の騎士が加わっていた。一方、南部域に到達した法王勅命軍は、寄せ集めの軍の統制を図るために、大規模な演習を敢行した。ラマールにとっては初の陣頭指揮であったが、東部域での決闘の勝利で増長していた若き将は、重臣の忠告も聞かず血気盛んに部隊を進軍させる。

どくろの巨人は骨をきしませて、手を主に向かって伸ばした

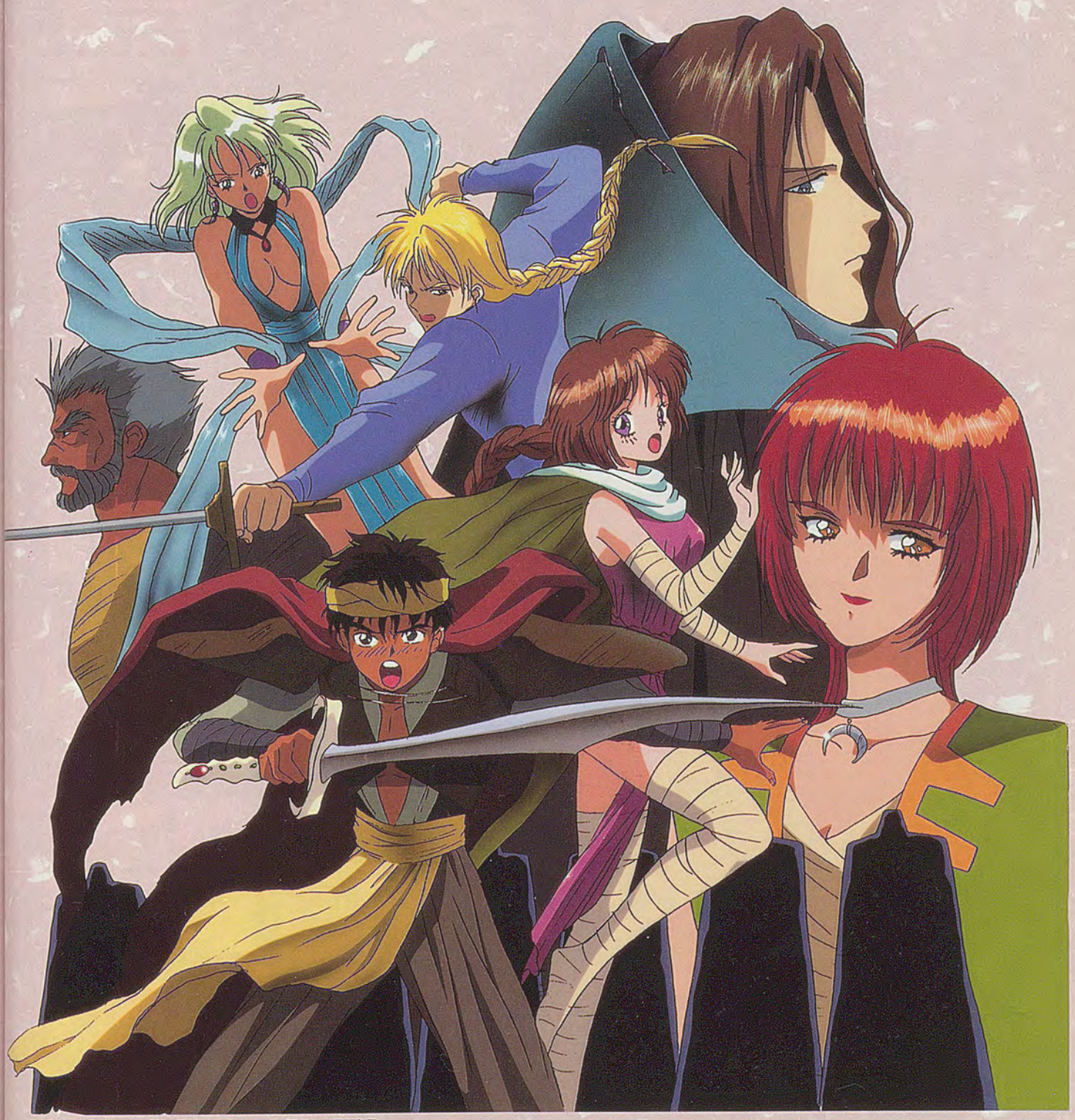
バイロンが黄金に輝く儀杖を振り、白軍が凸型陣のまま全軍突撃を開始した

聖刻大全

真・聖刻の時代

地母神カリーマを信仰する中原の国キタン。この国に東方の魔の手が迫っていた。この地に眠るとされている伝説の操兵《白き騎士》。その仮面を、機体を、そして乗り手を求めて練法師は徘徊する。

中原に《白き王》目覚めるわずか前、キタンに別の《聖刻》が出現する。



DATA：SFCソフト「真・聖刻」　パッケージイラスト／只野和子

中原暦一四〇〇年代末、中原のほぼ中央に位置するキタン国において、やがては中原全土を巻き込む大きな事件が発生した。

事件の中心には一人の少年がいた。

ラタキア平原北部を縄張りとする盗賊団に身をおくその少年は、キタンの討伐軍によって盗賊団が滅ぼされた際に捕らえられ、王宮の牢に投獄された。そこで少年は一人の少女と運命的な出会いをはたす。

持ち前の好奇心から、捕らえられた盗賊の少年を一目見ようと牢に足を運んだ少女は、少年に興味を持ち、度々牢に足を運ぶようになる。

少年の名はシフォン。キタン一帯を騒がせた盗賊団頭領の息子。少女の名はミシェルダ。国民の母と呼ばれた慈悲深いキタンのミシュラ・カメル女王の娘である。

DATA：CDシネマ「真・聖刻～プレリュード～」ジャケットイラスト／只野和子

キタンに渦巻く暗雲

キタン王宮の異変は徐々に進行していった。異変に気づいたのはミシェルダであった。王宮の人間の行動が、以前からは考えられないように変貌していったのである。それは慈愛の女王と呼ばれた母ミシュラも例外ではなかった。途方に暮れたミシェルダは、牢で知り合った盗賊団の少年シフォンに、脱走の手引と引き換えに協力を要請する。

●アグーラ●
キタンで暗躍する謎の組織、聖輪八門に所属する《水の門》の練法師。実は幼い頃にさらわれたミシェルダの姉で、洗脳され練法師として育てられた。練法師たちの真の目的である《白き騎士復活計画》の中にシフォンという予定外の因子が混入してきたため、彼を監視する目的で、身分を詐称して行動を共にする。

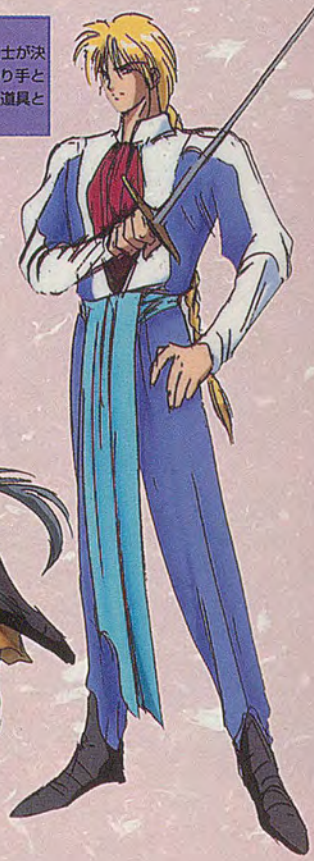
●ミシェルダ●
キタン女王ミシュラ・カメルの娘。母親の教育の成果もあって慎み深く上品な物腰を身につけているが、本当は好奇心の塊のような性格で、よく城を抜け出しては市中をお忍びで歩き回るクセがある。そのため、国民からは「お転婆王女」として親しまれている。

●シフォン●
盗賊団「ラウドリオン」頭領タグマの息子。幼い頃タグマに拾われ、実の息子同様に育てられ、戦士として盗賊としてそして操手としての厳しい訓練を受けている。暗躍する練法師の魔の手からキタンを救うために、王女ミシェルダとともに伝説の操兵《白き騎士》を求めて中原を疾走する。

と盗賊の少年

異変の原因を、最近王宮に招かれた東方の占術師の仕業と睨んだ二人は、その占術師を追い詰める。だが、占術師の正体は練法師であった。カーシャと名乗った練法師の逆襲で窮地に陥る二人。そんな二人を救ったのはシフォンが父より預かっていた謎の宝玉であった。

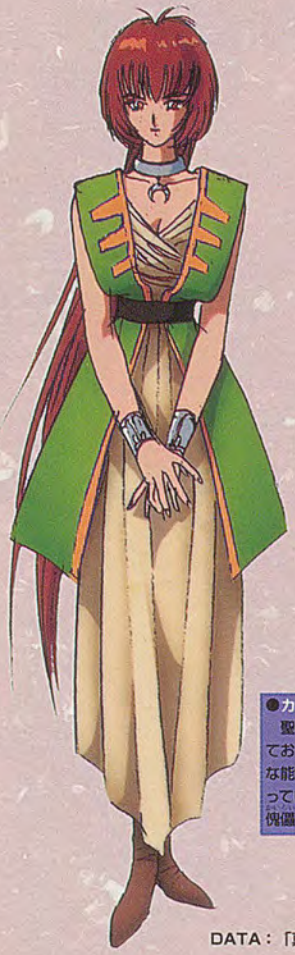
危機を乗りきった二人は、練法師の追撃から逃れるために王都を脱出した。



●ルシュナス・カーラング●
キタンの貴族カーラング伯の息子で、親同士が決めたミシェルダの婚約者。《白き騎士》の乗り手としての資質を備えていたため、練法師たちに道具として利用される。

●ゾマ●
謎の組織、聖輪八門の長で《風の門》の練法師。恐るべき実力の持ち主で、仲間の練法師たちは皆彼を畏れ敬っている。伝説の操兵《白き騎士》を復活させ、その力を使って世界に混乱を招こうとする。感情を滅多に表に出さない不気味な人物。

●タグマ●
シフォンの養父にして盗賊団「ラウドリオン(吼える獅子)」の頭目。《白き騎士》の従者である操兵サイブレム(の仮面)に心を操作され、《騎士》の乗り手(選ばれし者)を育てるために、サイブレムを盗み出した。



●カーシャ●
聖輪八門《隠の門》の練法師。ゾマを心より信奉しており、公私ともに彼の側近を自任している。徹底的な能力主義者で、ともすればゾマよりも非情な面を持っている。キタン王宮に潜入し王宮の人間を次々に傀儡(かいらい)としていく。

DATA：「真・聖刻」　キャラクター設定／只野和子

白き騎士の復活

DATA：真・聖刻 「疾風かける戦野」 カバーイラスト／只野和子、新藤踊司

練法師たちの目的は《白き騎士》と呼ばれる伝説の操兵の復活であった。《白き騎士》はそれぞれ「仮面」、「心臓」、「身体」の三つに分けられ、中原各地に封印されていた。この三つの部品を集め、《白き騎士》に選ばれた「乗り手」を乗せることによって伝説の操兵は復活する。練法師たちは復活した《白き騎士》の超絶的な力を使い、中原の掌握を企んでいた。

シフォンにこの「乗り手」の資質を見出した練法師たちは、執拗に二人をつけ狙う。一方、シフォンたちも練法師の野望を打ち砕くためには《白き騎士》の力が必要と考え、その部品を求めて中原を彷徨う。

練法師の追撃をかわし、ついに《白き騎士》の「仮面」を手に入れるシフォン。しかし「身体」は練法師たちによって持ち去

法師たちによって持ち去られてしまったあとであった。中原を救うために練法師たちとの戦いを決意したシフォンは、《白き騎士》の「身体」を取り戻すために再びキタンへと向かった。

キタンへ戻ったシフォンたちの目の前に謎の黒い操兵が出現する。

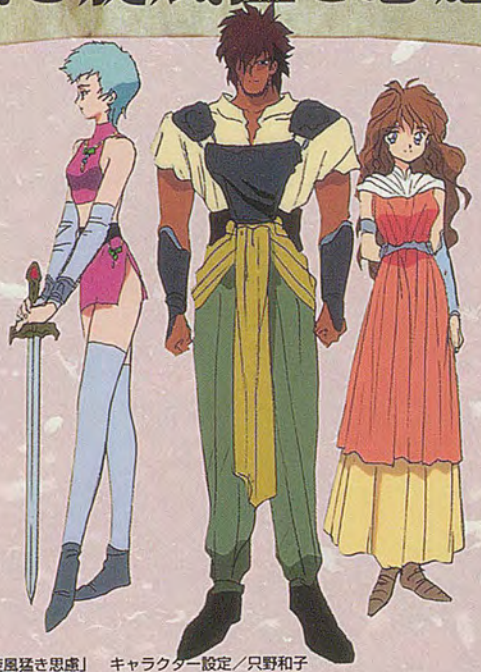
これこそ《白き騎士》バルチサスの「身体」であった。シフォンたちが手に入れた《白き騎士》の仮面は半分でしかなかったのである。練法師たちは、手に入れていた残り半分の「仮面」を「身体」に装着し、一時的に《白き騎士》を復活させたのである。しかも、「乗り手」は練法師によって洗脳されたルシュナスであった。ルシュナスもまた「乗り手」としての資質を持っていたのである。だが、《白き騎士》の復活は完全なものではない。二つに分かれた「仮面」を統合しなければ、真の力は発揮できない。

《神が宿る山》と呼ばれる山の頂きでシフォンとルシュナス、二人の「乗り手」と二枚の「仮面」の戦いは開始された。

●白き騎士バルチサス●
〈八の聖刻〉といわれる伝説の操兵。「仮面」と「身体」と「心臓」の三つに分割され、中原の何処かへ封印されている。

DATA：SFCソフト「真・聖刻」
パッケージイラスト／やまだたかひろ

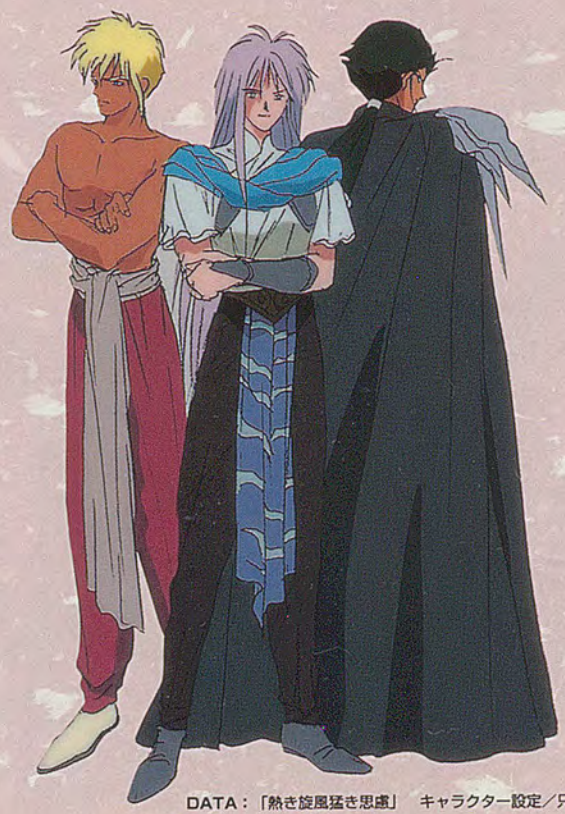
真・聖刻　外伝
熱き旋風猛き思慮



DATA：「熱き旋風猛き思慮」　キャラクター設定／只野和子

DATA：「熱き旋風猛き思慮」　カバーイラスト／只野和子、新藤踊司

DATA：「熱き旋風猛き思慮」　挿絵／只野和子



DATA：「熱き旋風猛き思慮」　キャラクター設定／只野和子

真・聖刻の世界

●キタンの情勢●キタンの盗賊団●聖輪八門●白き騎士の覚醒●真・聖刻絵巻

聖刻大全

真・聖刻の世界

真・聖刻の舞台となるのは、中原のキタン国である。伝説の操兵《白き騎士》をめぐって、練法師たちと盗賊の少年シフォンとの戦いが繰り広げられた。

【キタンの情勢】

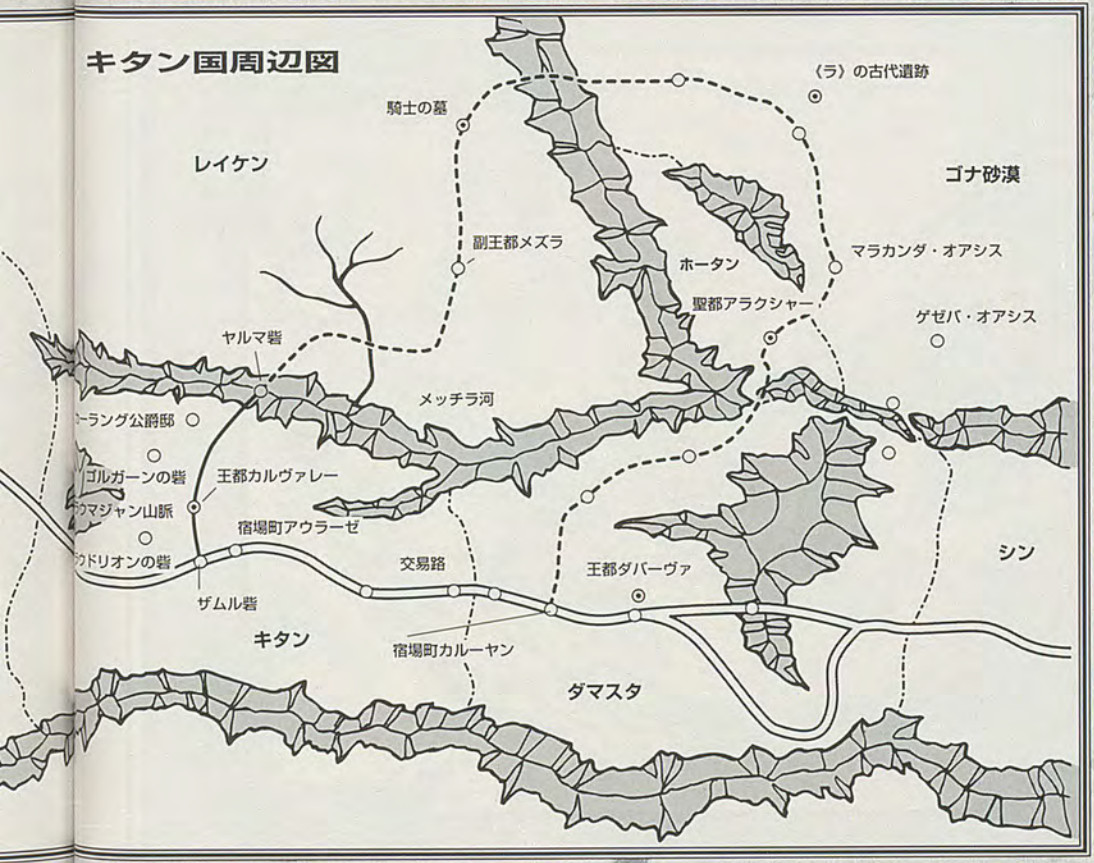
「真・聖刻」の舞台となるのは中原暦一四〇〇年代末のキタン国である。キタン国は地母神カリーマを信仰する宗教国家で、中原のほぼ中央に位置している。南北を細長い山脈に挟まれ、東西に伸びるこの王国の大半は中原の他の国家と同じく、乾いた荒野が占めている。一部には砂漠も存在し、年々それが広がっているという報告もあった。苛酷な環境は中原諸国、どこも似たり寄ったりである

かつて中原に覇を唱えたラウマーナ帝国から独立したこの国は、隣接するダマスタ国との間で領土境界線を巡る戦いを繰り広げてきた。争いに終止符が打たれたのはごく最近のことであり、国境沿いには激戦を物語る砦跡などが点在しており、現在も国境警備の詰所として利用されている。

国教である地母神カリーマは、中原では珍しい女神を崇める宗教であり、キタン国の婦女子は、厳しい宗教上の戒律を課せられている。女性の肌の露出を極力抑える風習は他の国でもしばしば見受けられるが、厳格に未婚女性と既婚女性、加えて寡婦を服の色で区別させているといったことは、他の中原国家では見られない。

もっとも厳しさの反面、女性が社会的に優遇されている事実は無視できない。東西を問わず大陸のほとんどの国家が女の家督相続を認めてはいないが、この国ではそれが許されているばかりでなく、あらゆる階層で女の家長が多いとさえいわれている。現にキタンはここ数代にわたって女王を玉座にいただいている。

王都カルヴァレーはキタン北西の平原に位置している。隣国ダマスタの首都ダバーヴァの規模や、ホータンの聖都アラクシャーの華麗さなどとは比較にならないものの、《交易路》を旅する商人のなかには、こぎれいな



町並みや民衆の活気においては

まってきたともいわれている。

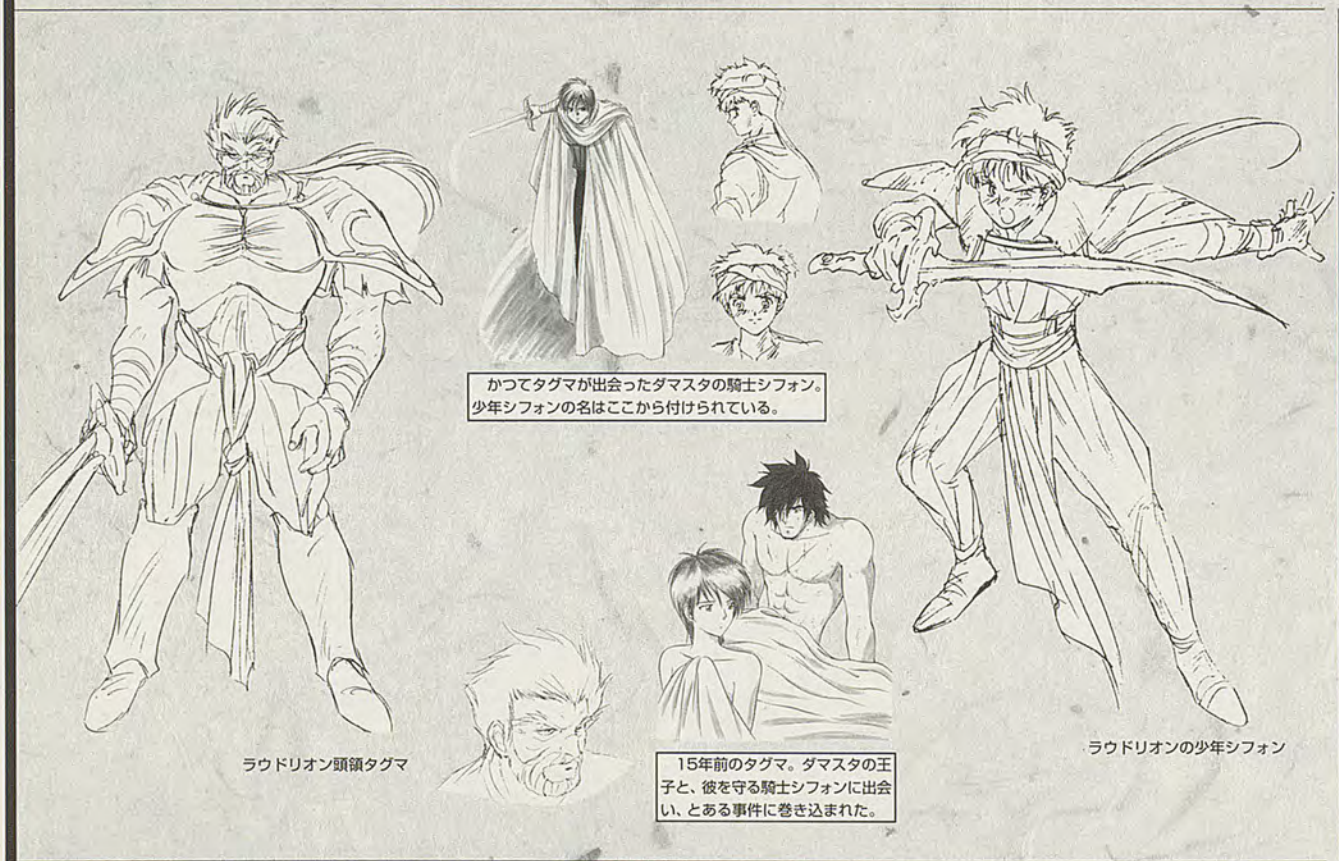
町並みや民衆の活気においては中原でも一、二を争うほどと評する者もいる。そのカルヴァレーの北端には王宮がそびえている。街の規模から考えても決して大きいとはいえないが、威圧的な雰囲気のない建物は民衆の間でも好意をもって迎えられている。それは、国民から「国の母」と慕われている現女王ミシュラ・カメルのカリスマ性とも大きく関係していた。

ダマスタとの戦役終結以来、周辺国家との関係は良好で、現在は内政も安定している。唯一の問題といえば、《交易路》沿いに出没する盗賊団だけといってもよい。《交易路》はアハーン大陸の東西を結ぶ大動脈だけに、近隣諸国からの討伐要請も日ましに高まっていた。その盗賊団の中でもとりわけ大きな集団が三つあった。一つはキタン北西部を縄張りとする《ゴルダン》、二つ目は南部を縄張りにする《フォルカン》、そして最後に北部を縄張りにする《ラウドリオン》である。

【キタンの盗賊団】

この時期、キタンには多くの盗賊団が出没している。その理由は、キタン・ダマスタ戦役のときに集められた傭兵の成れの果てとも、交易路の再開にともなって安定しだしたキタン経済を狙って、各地から盗賊団が集まってきたともいわれている。

中でも有名なのが、キタン北部を縄張りにしている《ラウドリオン》であった。首領格のタグマと呼ばれる男の的確な指揮のもと、襲撃は毎回計画的に行われ、引き揚げる際も複数ある中継地点を経由するといった念の入れようであった。キタン国軍も幾度となく討伐部隊を派遣したが、彼らの巧妙な手口と巧みな逃走術の前に、一人として捕らえられず、根拠地の所在などもまったく不明のままであった。



【聖輪八門】

聖輪八門の練法師たちは、キタンのどこかにその存在の手がかりが眠っている《白き騎士》を発見し、蘇らせ、中原支配の先兵として利用するために活動している。そのためにまずキタン王家を掌握（女王を彼らの傀儡と）し、国内の全土に探索の手を伸ばし始めた。そして、それと同時に《騎士》の乗り手を育成するために、《選ばれし者》としての素養を持つ者を探し始めた（それがミシェルダの婚約者のルシュナスである）。

彼らがルシュナスを必要としていたのは、彼らの中に《騎士》を操ることのできる者が存在しなかったからに他ならない。《白き騎士》は乗り手を選ぶ。それは、たとえ天地を揺るがす超絶的な力を持つ練法師といえども

例外ではなかったのである。

そして彼らは《騎士》を発見した。しかしそれは、古代の戦いで割れた仮面の片側が再生したもの――「感情」を司る《右仮面》だけの《騎士》であった。

計画の主導者である輪師ゾマがこれに気づいた時、ルシュナスと同等の力を持つ謎の少年が彼らの前に現われた。それがサイブレムに導かれたもう一人の《選ばれし者》シフォンだったのである。

ゾマはシフォンに着目し、彼のもとに配下の練法師アグーラをスパイとして送り込んだ。そして、彼女の報告から、シフォンがもう一つの《騎士》（すなわち「理性」を司る《左仮面》の《騎士》）を探している事実を突き止め、《騎士》の真の力を得るべく、二つの仮面の統合を謀る。そのためには、シフォンの見つけたもう一つの《騎士》を手に入れる必要があった。聖輪八門が物語の途中からシフォンを狙い始めるのはそのためである。「感情」だけの仮面では完全な支配下に置けない（いつ荒れ狂うかわからない）のだ。

【白き騎士の覚醒】

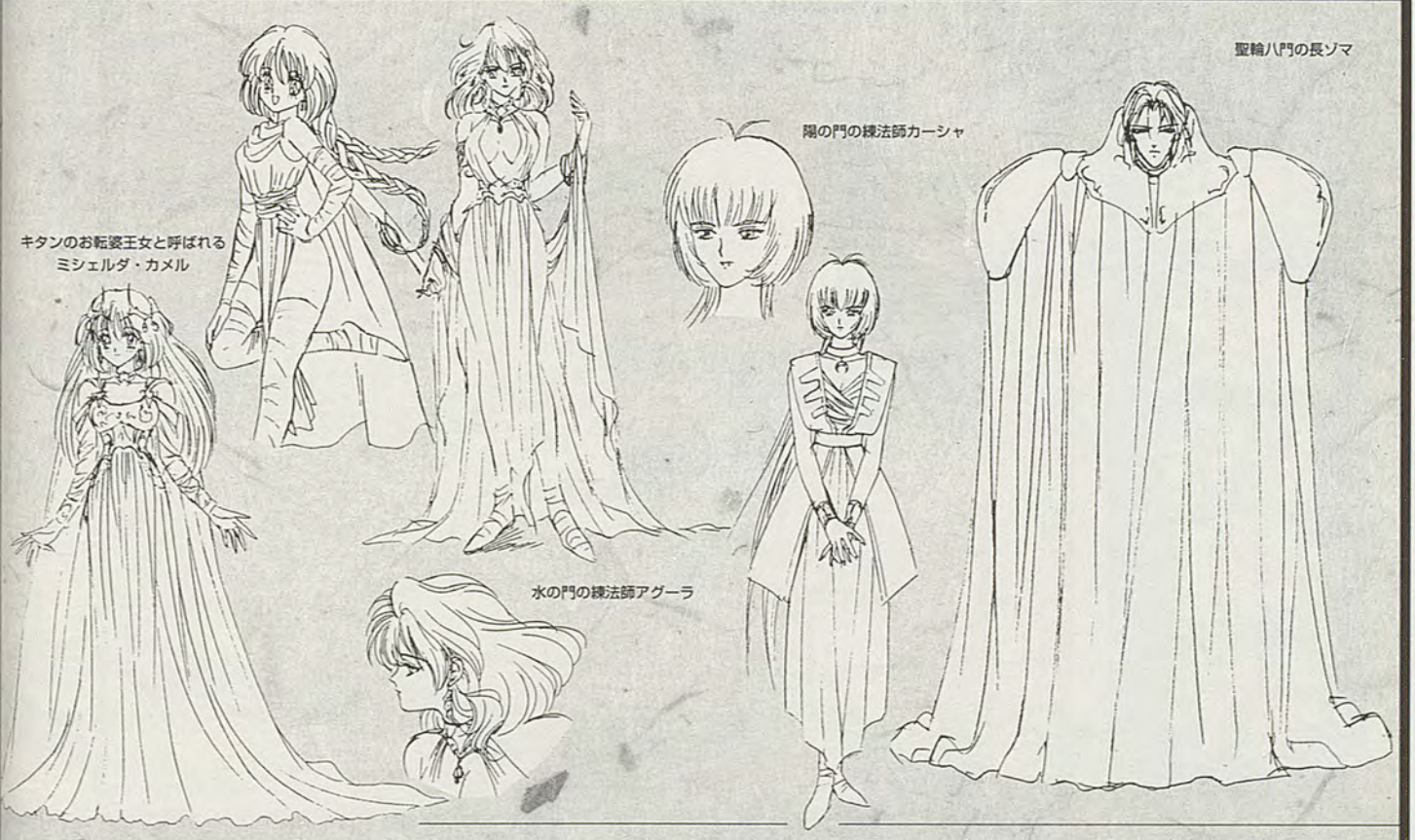
物語の重要な鍵となる《白き騎士》バルチサス。この《八の聖刻》の一つといわれる操兵は物語のなかで様々な画策を行なった。シフォンが使用した狩猟機サイブレムにしても、その動向はすべてバルチサスによって計画されたものであった。

まず、サイブレムはバルチサスの命を受け、バルチサスを復活させるための活動を開始する。自分が保管されていたカーラング家の操手の中でもっとも力を持ったタグマの心を操り、自分を外へ持ち出すように仕向けた。その上で、主であるバルチサスを復活させるために必要な人間の操手――《選ばれし者》を育てるようタグマを誘導した。

タグマは、それがあたかも自分の意志であるかのように、自分の後継者を育てるための活動を開始したのである。

簡単に言えば、タグマはサイブレムの操り人形のようなものである。操兵は、それがどのようなものであれ人を触媒にしなければ動くことができない。意志の強い者ならば仮面に魅入られずにそれを屈伏させることもできようが、サイブレムの仮面は並の人間の意志に比べればはるかに強い力を持っていたのである。

それゆえ、タグマは自分の行動が主人のカーラング公を裏切るものであるとわかってはいるものの、サイブレムから離れることができないでいたのである。



タグマは野盗を続けながらキ

タグマは野盗を続けながらキタン全土を旅し、《選ばれし者》としての素養を持つ者を探し求めた。その結果見つけたのが、孤児であり、生まれてまだ物心もついてない少年シフォンだった。

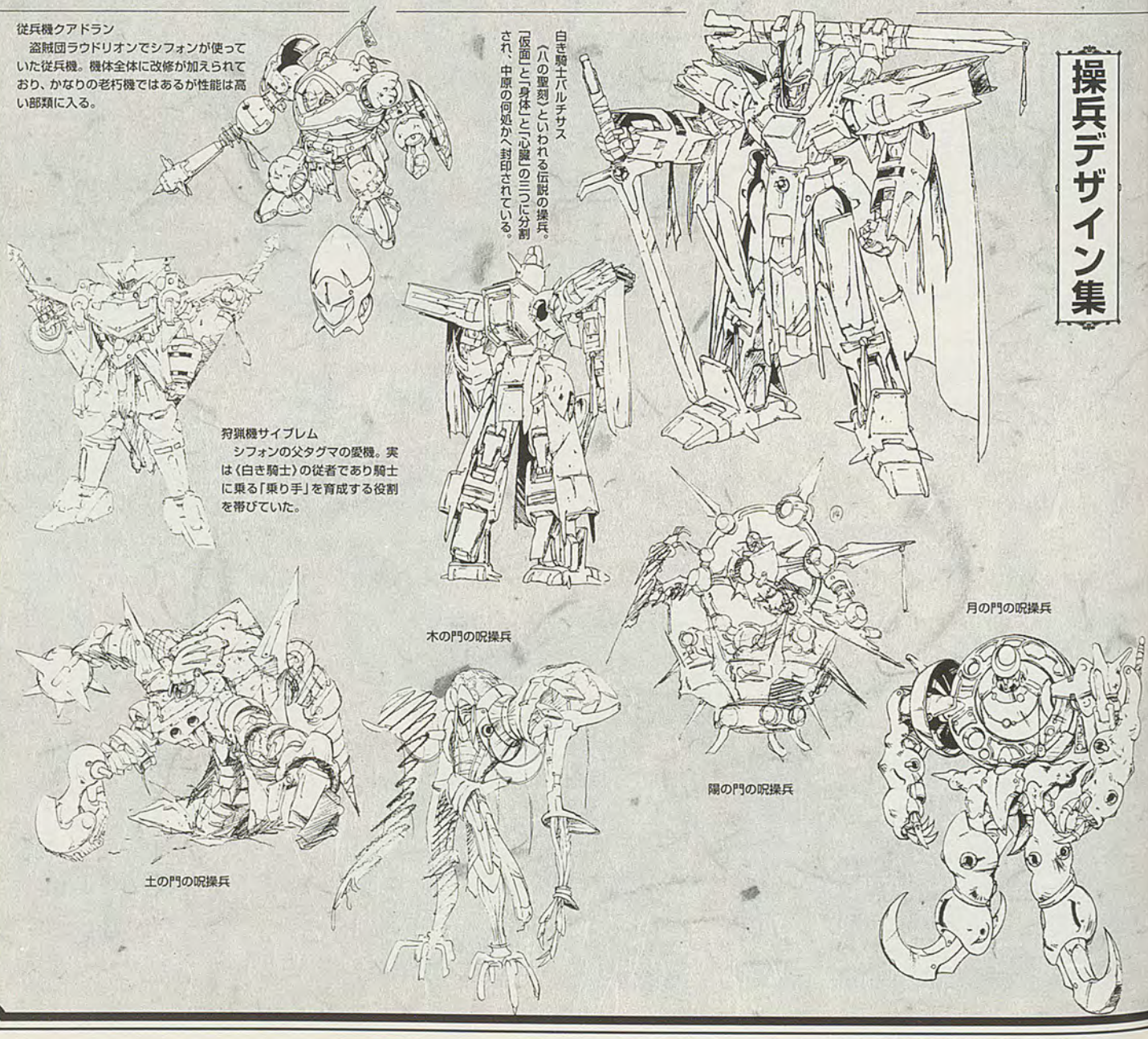
タグマは、シフォンをサイブレムの操手にするための育成を行なったが、それはすなわちバルチサスの操手にするための育成でもあったのだ。

しかしバルチサス(白き騎士)にとっては、シフォンですら《選ばれし者》の代用品にすぎなかった。実際、彼はまだ、真の《選ばれし者》を必要としていないのである。なのに何故それほどまでに急いで後継者を育てさせたのか。

バルチサスの《左仮面》は、自分の分身である《右仮面》に異変が起こったことを「理性」で察知していたのだ(《右仮面》の所在を察知することはできないが、それに何か起こったことぐらいは知ることはできた)。

自分の分身が悪用される可能性を考慮した彼は、どうしてもそれを確認したかった。だから、「仮の(一時的な)《選ばれし者》」の育成をサイブレムに命令したのである。

操兵デザイン集



真・聖刻絵巻

ここに掲載されているイラストは、小説版真・聖刻「疾風かける戦野」に集録された挿絵で、此路あゆみ（キャラクター）、新藤踊司（メカニック）の二人による合作である。

従兵機のむき出しの操手槽から、シフォンは一際大きなかけ声を上げた

王宮のバルコニーで、ミシェルダはひとり頬杖を突いていた

民家の屋根が派手な音を発して弾け飛ぶと、そこから巨大な腕が伸び出してきた

森の奥には異様な形をした操兵が待っていた

呪操兵の背後に回り込んだベイシャスは敵の右腕をつかんだ

アグーラの腰から上のすらりとした肢体と、ミシェルダのぽっちゃりした胸から上がシフォンの目に焼きついた

ミシェルダは侍女三人にかしずかれて湯浴み、髪の手入れ、衣裳合わせをした後、王子との晩餐に誘われた

幌をはねのけた馬車の中からは異様な操兵が現われた

サイブレムの仮面は砕け散り、〈白き騎士〉の仮面はその代わりにサイブレムに収まった

人に対するとは思えないルシュナスの物言いにミシェルダは青ざめた

シフォンは黒い操兵を見た瞬間、得体の知れない衝撃を感じた

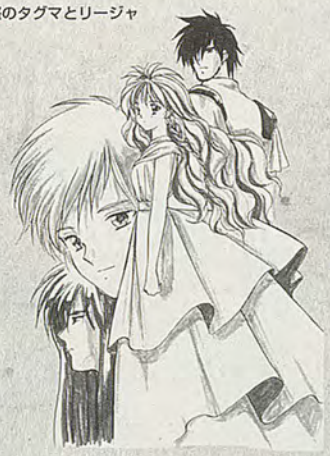
仮面の下から現われたのはメズラで行方不明になっていたアグーラであった

真・聖刻外伝絵巻

こちらは舞台を一五年さかのぼった真・聖刻外伝「熱き疾風　猛き思慮」に集録された挿絵で、キャラクターイラストは只野和子、メカニックイラストは新藤踊司が手掛けている。

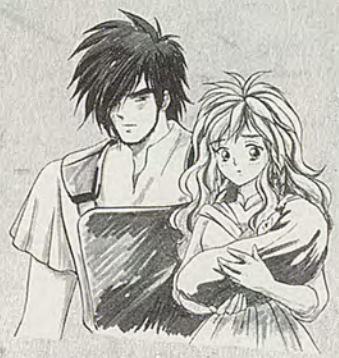
見渡す限り一面に石柱がそそり立っている。そこはキタン軍の操兵訓練場の一つだった

慣れない操手槽の中でリージャは混乱していた



キタンを縄張りにする野盗のタグマとリージャ

〈疾風のシフォン〉と呼ばれるキタンの騎士



リージャとタグマは焼き払われた廃墟の村で赤ん坊を発見する

リージャは小さく舌を出して勝利の笑みを浮かべた

アジン・ラハームは頭部の装甲を力任せに引きはがした

一途な瞳でタグマを見つめる少女リージャ

聖刻大全

ワースブレイドの時代

大陸の西に広がる地域『西方』。剣を持つ巨人兵を生み出す謎の組織が暗躍し、諸国は剣を交えて争いに明け暮れ、人々は剣を携え一攫千金を求めて世界の深淵へと踏み込んで行く。

この時代は『剣の時代』とも呼ばれていた。

の時代

人間たちの活躍の時代であった。

彼ら、冒険者たちは、ある者は富を、ある者は自らの治める王国を、またある者は真実を求めて、人々が知り得ぬ世界の深淵に踏み込んでいった。

DATA：「スタートセット」BOXイラスト／末弥　純

DATA：「スタートセット」解説書表紙イラスト／幅池裕行

いまだ、すべてが混沌の内にあった時代、山野には巨獣たちが暮らし、異界、魔境が口を開き、超常的存在が現世に干渉を行っていたころ。

後の世に、〈剣の年代〉と呼ばれるその時代は、自らの力を頼んで剣技をふるい、魔力や操兵を駆使する者ども、すなわち冒険者と呼ばれる流浪の

冒険者たちの

無論、すべての冒険者たちが成功をおさめたわけではない。彼らの末路はむしろ悲惨なものであり、その本分をまっとうしたと言える人間は決して多くはない。

それでも冒険の日々に夢をはせ、壮大なる謎に挑む者たちがあとを絶たなかったのは、あるいはこの時代そのものが冒険を欲していたからなのかも知れない。

そう、じつは人間こそ、真に世界の欲する存在であることを、この時代は証しているのだ。

DATA：「マスタースクリーン」表紙イラスト／武半慎吾

DATA：「スタートセット・リニュウアル」
カバーイラスト／岡崎武士

剣の年代と呼ばれた時代、アハーン西方大陸は、歴史上最も多くの冒険者たちが活躍した場所であった。

冒険者と一口に言っても、その出身や身分は様々であった。その多くは、単に鍬を剣に持ち替えただけだったが、逆を言えば一生貧農ですござるをえない人々が、その才覚のみで名を上げる唯一の手段だったのだ。

彼らにとって、究極の目標は操兵だった。操兵こそ究極の力の象徴であり、成功への最短の道だったからである。

一方、まったく別の目的をもって旅に出る人間もあった。ある種の技、ことに魔力を操る練法師や、盗賊、密偵、暗殺者など、組織を背景に持っている人々である。彼らの旅は、技の鍛練や知識の追求であり、秘密の任務を負うこともあった。

同様に、僧侶は、仕える神や宗派の目的のために旅をした。

彼らの目的はしばしば一致し、結果として冒険者の一団を組むことも少なくなかったという。

DATA：「エクスパンションセット1」
BOXイラスト／岡崎武士

DATA：「サプリメント1・東面の魔道士」
表紙イラスト／岡崎武士

の旅人たち

DATA：「エクスパンションセット3」
BOXイラスト／岡崎武士

DATA：「エクスパンションセット2」
BOXイラスト／岡崎武士

DATA：「サプリメント2・魔王の復活」
表紙イラスト／岡崎武士

西方の操兵
剣の年代、操兵は決戦のための武具であった。その数は、全西方を合わせても数千に満たず、狩猟機にいたってはさらにその数分の一だった。それゆえ、操兵は戦の最後の局面に用いられる、騎士のための究極の武具であり、その決戦の前の人間の戦など、単なる儀礼化した小競り合いにすぎなかった。
DATA：「エクスパンションセット2」BOXイラスト／岡崎武士

DATA：「サプリメントブック2」表紙イラスト／岡崎武士

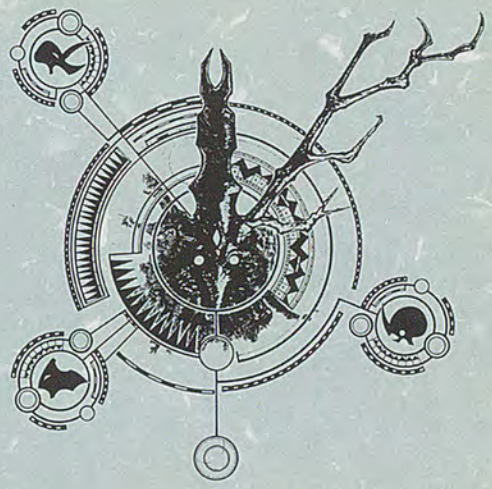
だが、黒の帝国ダカイト・ラズマは、この概念を大きく覆す存在だった。彼らこそ、操兵戦を後世の集団戦へと導いた最初の存在であり、操兵が帝国をして西方北部征服の一歩手前まで到達させた原動力であった。

この時代、操兵製造の秘法を守る西方工呪会は、まだ秘密の組織であり、西方を陰で掌握してはいたが、国家に表立って干渉するようになるのはさらに数世紀後のことになる。

DATA：「スタートセット・リニュウアル」カバーイラスト／岡崎武士

DATA：「サプリメントブック1」表紙イラスト／岡崎武士

DATA：「シナリオソースブック・遥かなるカイ・タイン」
イラスト　神宮寺一



伝承

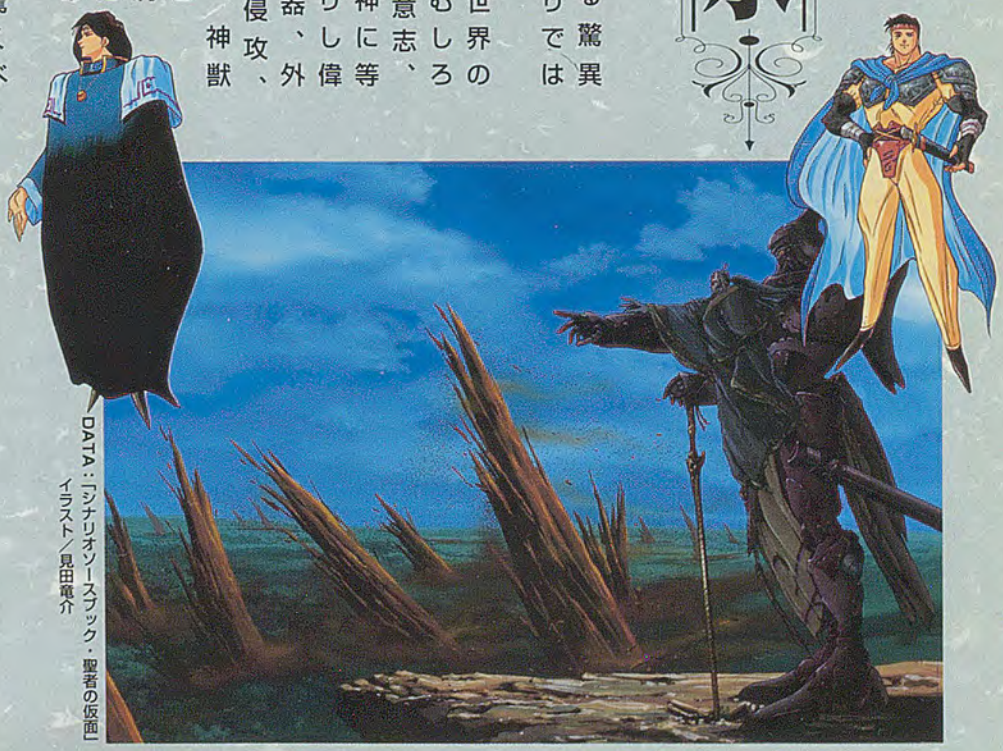
この世界に満ちる驚異は、なにも聖刻ばかりではない。

この時代、聖刻は世界の秘密というよりも、むしろ道具であった。神々の意志、あるいは古代の神に等しき者どもの作りし偉大なる魔器や神器、外なる世界からの侵攻、地にすまう魔獣、神獣たち……これらとおなじ、世界に満ち溢れる力の一つにすぎなかったのである。

世界は、それら、驚くべき事象によって支配され、動いていたのである。

剣の年代とは、まさにこれらの驚異が、聖刻とともに世界を支配していた時代にほかならない。

やがて、神々は去り、数々の驚異は外なる世界へ追いやられることになる。だが、その物語は、いまだに語られてはいない……。



DATA：「シナリオソースブック・聖者の仮面」
イラスト／見田竜介

ワースブレイドの世界

●大地　●風土・民族・宗教　●操兵と西方工呪会

ワースブレイドの世界

大地

アハーン大陸西方、あるいは単に西方大陸と呼ばれるこの地は、大別して三つの地域から成り立つ。

【西方南部域】

西方南部は、この時代、北部についで文明化された地域であった。

だが、その実体は、北部を放逐された流民たちや、土着の未開人たちが、北部への劣等感から作り上げた地域であり、文明国のまねをしているにすぎない状態にあった。

南部は開拓された年代が比較的新しいため、人間の手の入っていない地域が数多く存在する。このため、北部に比較すると、はるかに多くの自然の驚異が存在する。通常の巨獣の類や、たちの悪い生物はもちろんのこと、古代に滅んだはずの魔獣の類が生存しているのは、この南部に限られている。

一方、古代に失われた遺産も、この地域から数多く発見されている。古代文明の中心は北部よりも南部にあったと思われ、より強大な存在を隠した遺跡などが、発見されずに残っていると考えられている。

【西方北部域】

北部は、文明の中心地域である。現在の西方民族の九割以上を占めるアハル人は、この地域から発生したと考えられ、現在にいたるまで十世紀近くも文明の中心となってきた。

この地域は、いくつかの未知の領域が存在するものの、ほぼすべての範囲に人の手が入っている。未知の古代の遺跡は皆無と言ってよく、冒険と発見の舞台は、すでに南部や西部に移っている。

この地域はまた、西方の信仰の中心地でもある。だが、歳月を経て、権力を得た宗教の例にもれず、宗派同士の抗争もたびたび起きている。

北部の歴史の中で、もっとも悲惨な戦いとなったのは、国家間の領土争いではなく、信仰の対立とそれから派生する民族抗争であった。

特に、かつての聖拝戦争を凌ぎ、現在進行中の最大の戦いが〈ラズマ戦役〉である。黒の帝国の二つ名を持つ辺境の帝国〈ダカイト・ラズマ〉による北部地域への侵攻は、収拾の気配も見せず、拡大の様相を呈しているという。

【西方西部域】

西部地域は、不毛の乾燥地帯である。この土地には、見るべきものがほとんど存在しないが、鉱物や鉱油などの資源は、どの地域よりも豊富に産する。これらの資源と、北部と南部を結ぶ運送業によって、この土地の商人たちは莫大な利益を手中にしているという。

この土地は南部と北部をへだてる緩衝地帯であり、西方の均衡を保つ重要な役割を果たす地なのだ。

the Frozen Sea
Muse Peninsula
land of Maba-di
the Thorta Sea
Lake Hevin
Induscul Peninsula
North Teelah-tein
the Da-buzz Sea
the Ru-hus' Conquered Sea
Mt. Meelah
Mt. Rugdus
Mt. Bazdy
the Orgo River
Gaoc Peninsula
Gurin Ra-bal
Mt. Odein
Mt. Djulock
Mt. Emlik
Mt. Elun
Runagt Mountains
Mt. Moneyn
Fulmeric Isle
Isle Scard
Molareid Forest
Find South Forest
Messi Peninsula
Gutshe Peninsula
Find Peninsula
Da-buzz Isle
the Ahanic Western Continent

ワースブレイドの世界

『風土・民族・宗教』

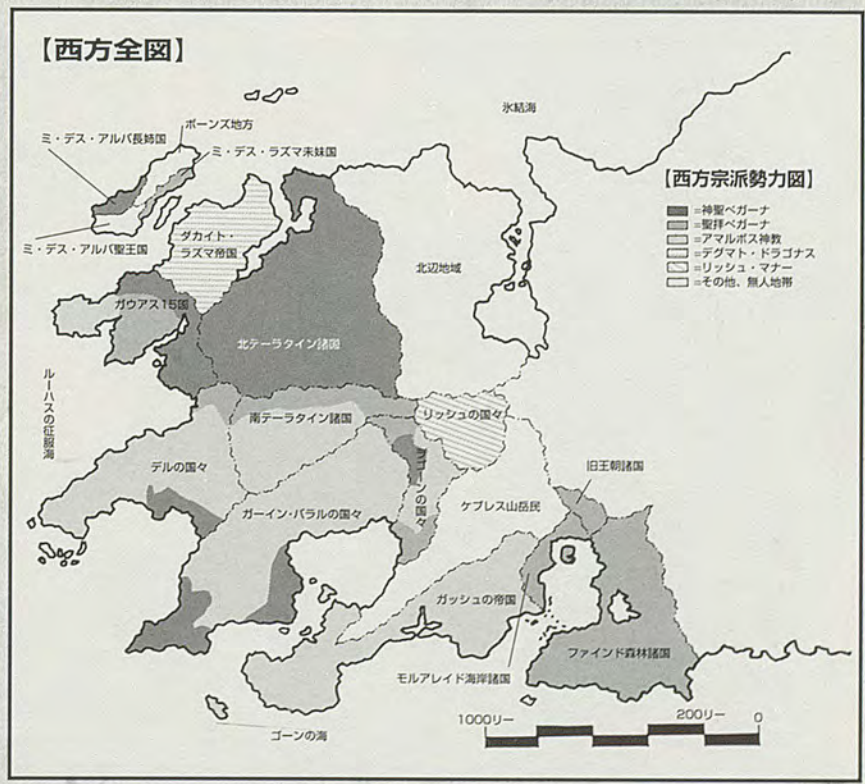
【風土】

西方では、南部の熱帯から、北部の寒帯まで、幅広い気候を見ることができる。

南部の熱帯には、ファインドやモルアレイドと呼ばれる大陸屈指の大森林が存在する。特にファインドは中原の大森林と直接つながっており、東方南部樹海をしのぐ大陸最大の樹海である。

西部の乾燥地帯は、大半が岩石砂漠である。砂礫砂漠は、さらに西のルーハス海沿岸の半島部と、西方中央付近の北部との境界付近に分布する。この地域は、ほぼ完全な不毛地帯で、人は住まない。

北部は寒冷な気候の平野である。湿地が多く、森林も見受けられるが、大半が耕地である。また、整備された都市や街道も多く、南部の比ではない。



神聖ペガーナ大司教

【宗教】

西方の宗教は、大別すると二種類の宗教から成り立っている。

ひとつは、ペガーナと呼ばれる、アハル人の信仰する西方最大宗派である。実際にはペガーナはさらに二つの勢力に分けることができる。神聖派と聖拝派である。この二派は、他の宗教に対するよりも、厳しく互いに対立しあっている。両宗派の対立は、西方暦七世紀の聖拝戦争で、神聖派が聖拝派を追放する形で一応の決着を見るが、実際には、北部を神聖派が、北部地域の西部にあたるガウアス諸国の一部と南部地域を聖拝派が支配するという形に変わったにすぎなかった。

また、この他にもペガーナは多くの小宗派に分派している。ペガーナは、もともと八柱のペガンズの神々を信仰する宗派だったが、神聖、聖拝両派が八柱神をひとしく崇めたのに対し、諸宗派の多くは、特定の神にのみ重きをおいたもので、神聖、聖拝両派ともこれらの諸派を激しく弾圧した。

ペガーナに対するもうひとつの宗派は、フェルム人の信仰するアマルポス神教と呼ばれるものである。

厳格な信仰を要求するペガーナらしい。髪の毛や瞳の色が非

厳格な信仰を要求するペガーナとは異なり、実用的な気質を持つフェルム人たちのこの宗教は、かなりゆるやかな信仰が許されている。

ペガーナは、諸派に対して非常に厳しい弾圧をおこなったが、このアマルポス神教に対しては、意外にも寛大な態度を取っている。これは、フェルム人が北部の中心地や南部にあまり勢力を持っていないということと、彼らが西方経済においてすでに欠くべからざる存在に成長していたためである。彼らの海運業が滞れば、北部の経済は壊滅とはいかないまでも、かなりの大打撃を被ることは明らかであった。さしもの二大ペガーナも、背に腹はかえられなかったというわけである。

この他にも、西方には数多くの宗教が存在する。南部グリム氏族のニーイン教、ラズマ氏族のデグマト・ドラゴナス(黒龍教)は有名である。また、東方の宗教である聖刻教会も、南部の一部にではあるが流布されつつあるようだ。とはいえ、全体に比べればごく少数にすぎない。

【民族】

西方は、その人口の九割をアハル人と呼ばれる民族で占められている。アハル人はやや褐色がかった白色系人種で、多くの民族の混血によって誕生したものらしい。髪の毛や瞳の色が非常に多種多様なのがその証拠だろう。

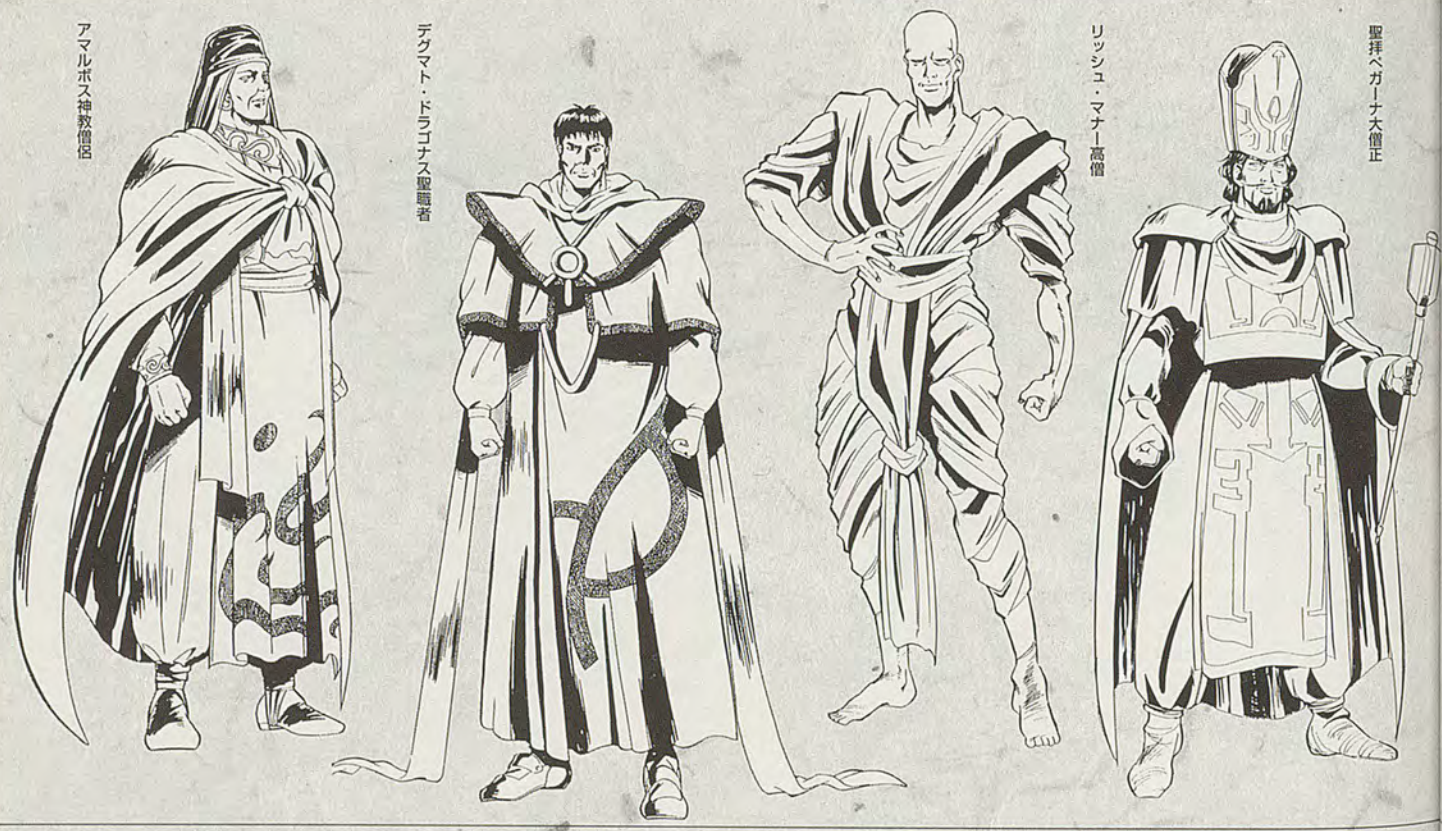
背も比較的高く、体格も細くはない。全体的に生命力にあふれた民族であると言えるだろう。

フェルム民族は、人口の一割弱を占める西方第二の民族である。褐色の肌を持ち、髪の毛は黒色、体格はアハル人よりも一回りは大きい。

彼らは中原に発生したらしく、海を渡った民族が、現在の南部沿岸の海洋民となり、陸路の民が西部～中央平原の騎馬民族となったと考えられている。

グリム民族は、南部の土着民族である。彼らはアハル人によって征服され、現在その数を急速に減少させつつある。体格は小柄で、フェルム人より薄いが、アハル人より濃い体色を持ち、髪の毛や瞳の色は漆黒である。南部にはアハル人との混血も多く、純粋な血統はすたれつつあるが、この民族の血を引く人間は、逆に増加しつつあるようだ。

ラズマ氏族は、ダカイト・ラズマにのみ存在する民族である。彼らは他民族の弾圧こそ行わないが、極端な純血主義を貫いており、現戦役でも統治は行うが、征服にありがちな蛮行はいっさい禁じている。これは信仰に関係があるらしい。



ワースブレイドの世界

『操兵と西方呪工会』

【剣の時代の操兵】

この時代、操兵はまだ金銭で購うことのできない非常に貴重なものであった。操兵の製作を一手に握っている西方工呪会は、接触をとることさえ一苦労で、たとえ交渉を持つことができたとしても、確実に入手できるとはかぎらなかった。要求された対価の数倍を用意したとしてもである。

先にも記したとおり、対価は金銭ではない。特殊な物品や聖刻石そのもの、情報などがそれである。

つまり、操兵の売り買いは完全な売り手市場なのである。

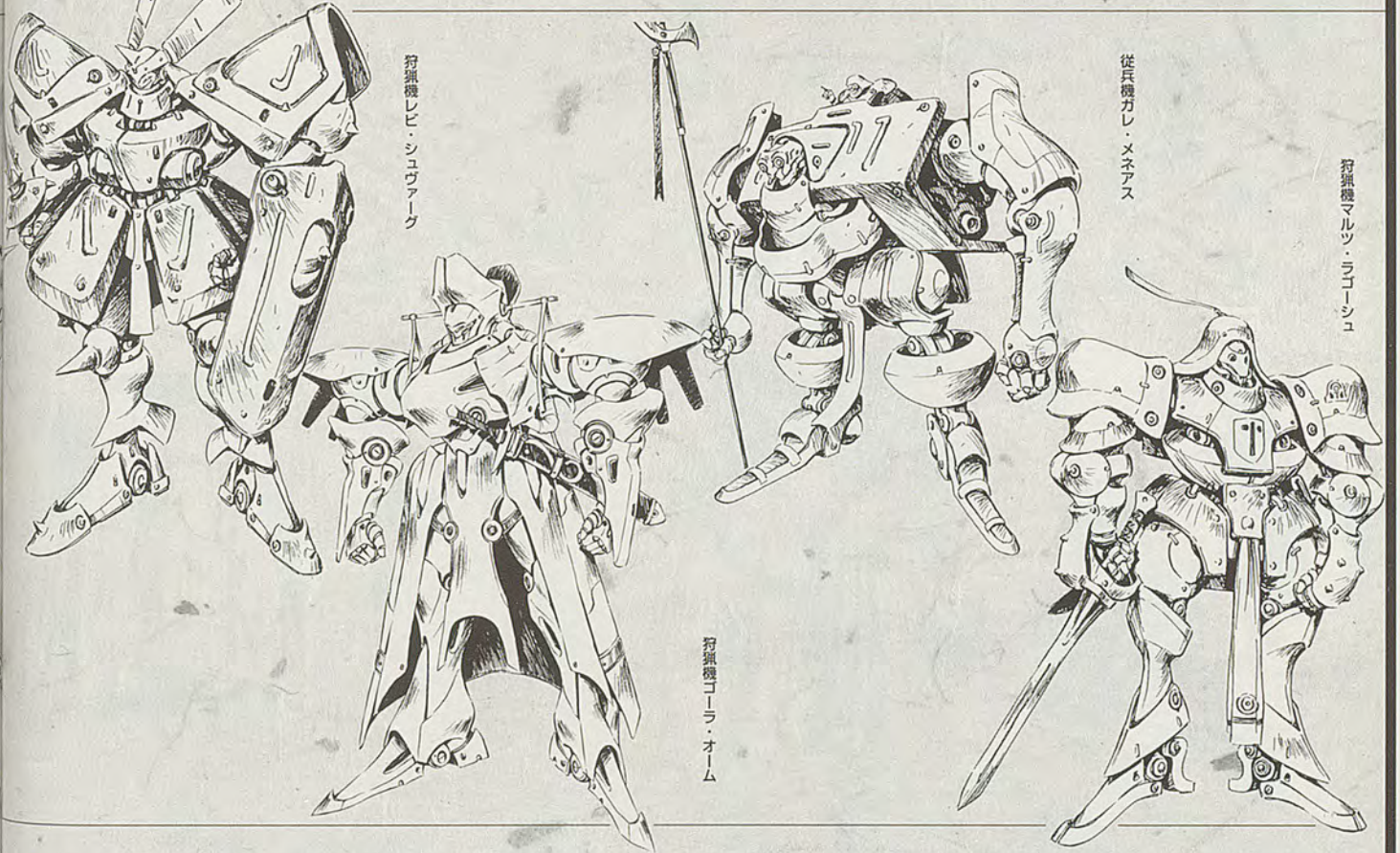
この時代においても、操兵の種類に変わりはない。主力となる騎士の操兵は狩猟機と呼ばれ、つねに戦場の旗頭（とくに高位の騎士にあたえられるものは旗操兵と呼ばれる）となり、決戦の場に赴く機体もこれである。

従兵機は、従者の操兵である。この操兵の役割は、基本的に狩猟機の補助と、武器などの運送、卑しむべき（これが当時の風潮だった）集団戦を行うことなどであった。

集団戦と言っても、後述する黒の帝国による非常に進んだ集団戦とはまったく異なるものである。従兵機は戦いが秩序を失った際の乱戦に参加する、いわば雑兵であり、使う武器も無粋（とされる）竿状武器や、槍、長柄の斧の類であった。

ただし、この時代、まだ従兵機の力は、狩猟機とそれほどかけ離れてはいなかった。このため、いわゆる騎士道から外れはするが、従兵機が騎士の狩猟機に挑むということも数多くおこなわれており、ほとんど一騎討ちに近い用いられ方もしていたようだ。

剣の年代には、後の時代よりもかなり多くの稼動する古操兵が発掘されている。西方工呪会の手を経ずに操兵を手に入れる数少ない手段は、未知の遺跡を発掘することだといってもいい。いわゆる冒険者が遺跡にこだわる理由も、ひとつにはこれがある。



【西方工呪会】

その呼称以外、世界の謎に最も近い存在であるはずの冒険者たちすら詳細を知らない謎の組織、それが西方工呪会である。

彼らは西方での新規の操兵の製作を完全に独占している。操兵鍛冶として選ばれた人間は、生涯組織を出ることはなく、その最大の秘密である仮面の製法に関しては、一国家の諜報、暗殺組織が束になってもかなわない組織力によって、この数世紀の間、完全に秘匿されつづけている。

西方工呪会が取り引きを行っているのは、国家か、それに匹敵する組織にかぎられる。個人との取り引きも例がないわけではないが、多くは豪商だったり、非常に高名な冒険者だったりと、西方工呪会にとってなんらかのメリットがある場合で、それ以外はまずありえないと考えてよい。

西方工呪会の生産する操兵は、基本的に六十四種類の〈原型機〉と呼ばれるものに限られる。外装を交換して別名を名乗る操兵もあるが、そうした作業は西方工呪会に頼る必要はないからで、多くの操兵は、中身を見れば原型機そのものでしかない場合が多い。

ただし、大国の旗操兵に関しては例外がある。特に北部列強の旗操兵は、ほとんどが特注の新規作製であり、ブレン・ゴールや、カルカラ・ノートは、事実上西方最強の工呪会操兵と言っていいだろう。

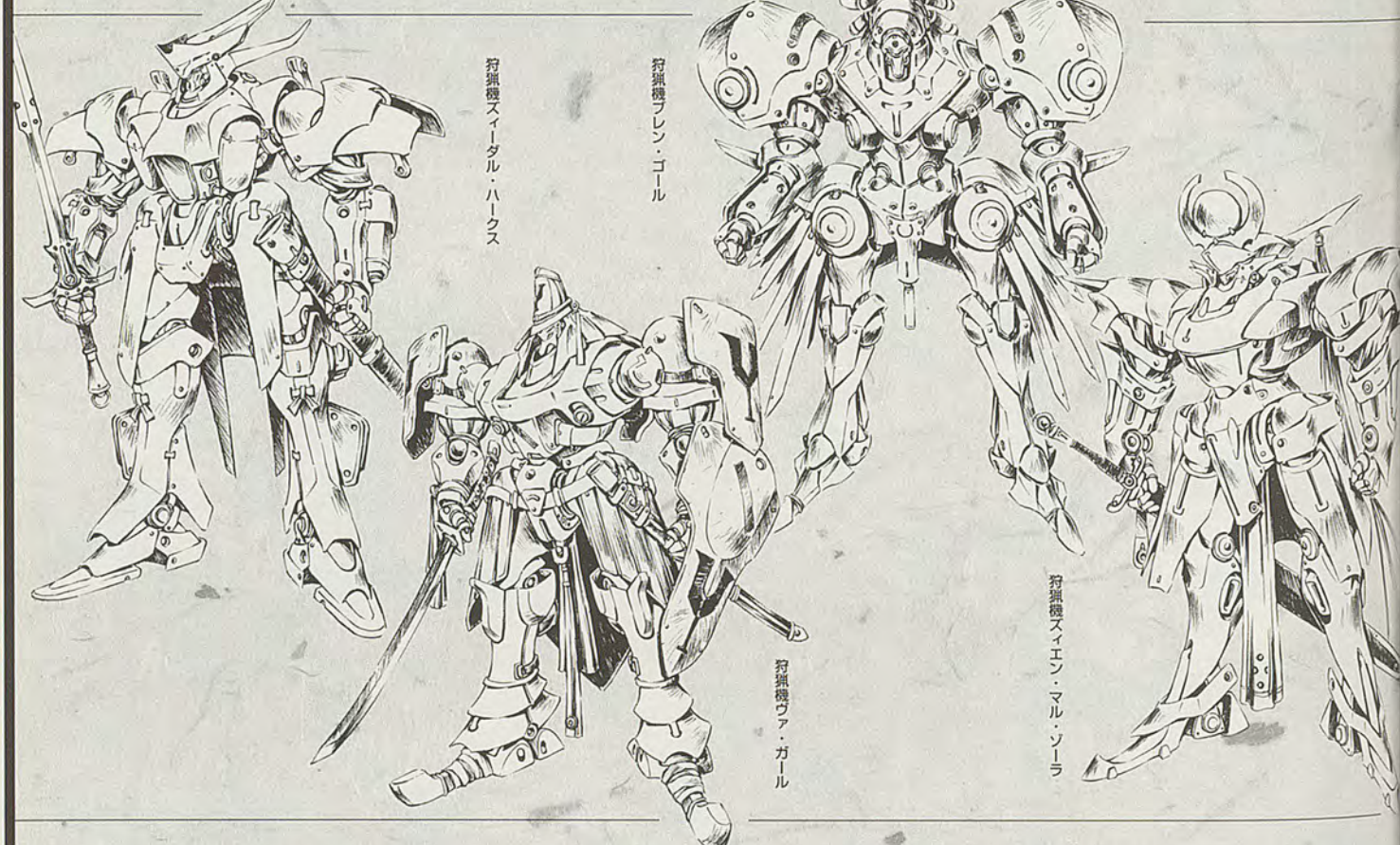
また、工呪会はダカイト・ラズマに対しても、多くの操兵を引き渡している。帝国のドアーテ種操兵は、古操兵を土台にしたものとは言われているが、ほぼすべて西方工呪会の実験的な機体であると考えられている。

このように、西方工呪会は、各国の情勢を利用して、新鋭機の実験を行っていると見ることができる。じっさい、最近になってバリアン神国に引き渡された原型機メーア・ソードは、各国の旗操兵を凌ぐ能力をもっているという。西方工呪会は、これをもって原型機のある種の完成型とみなし、以降はすべてこの機体を中心にした製作を行うと言われている。

一方、従兵機にも大きな変化が起きている。従来、粗悪な狩猟機という位置づけだった従兵機は、集団戦を実現するための機体へと方向転換が図られている。個体性能より、量産性や保守性に重きを置いた機種が増えているのが、その証明だろう。

【帝国の操兵】

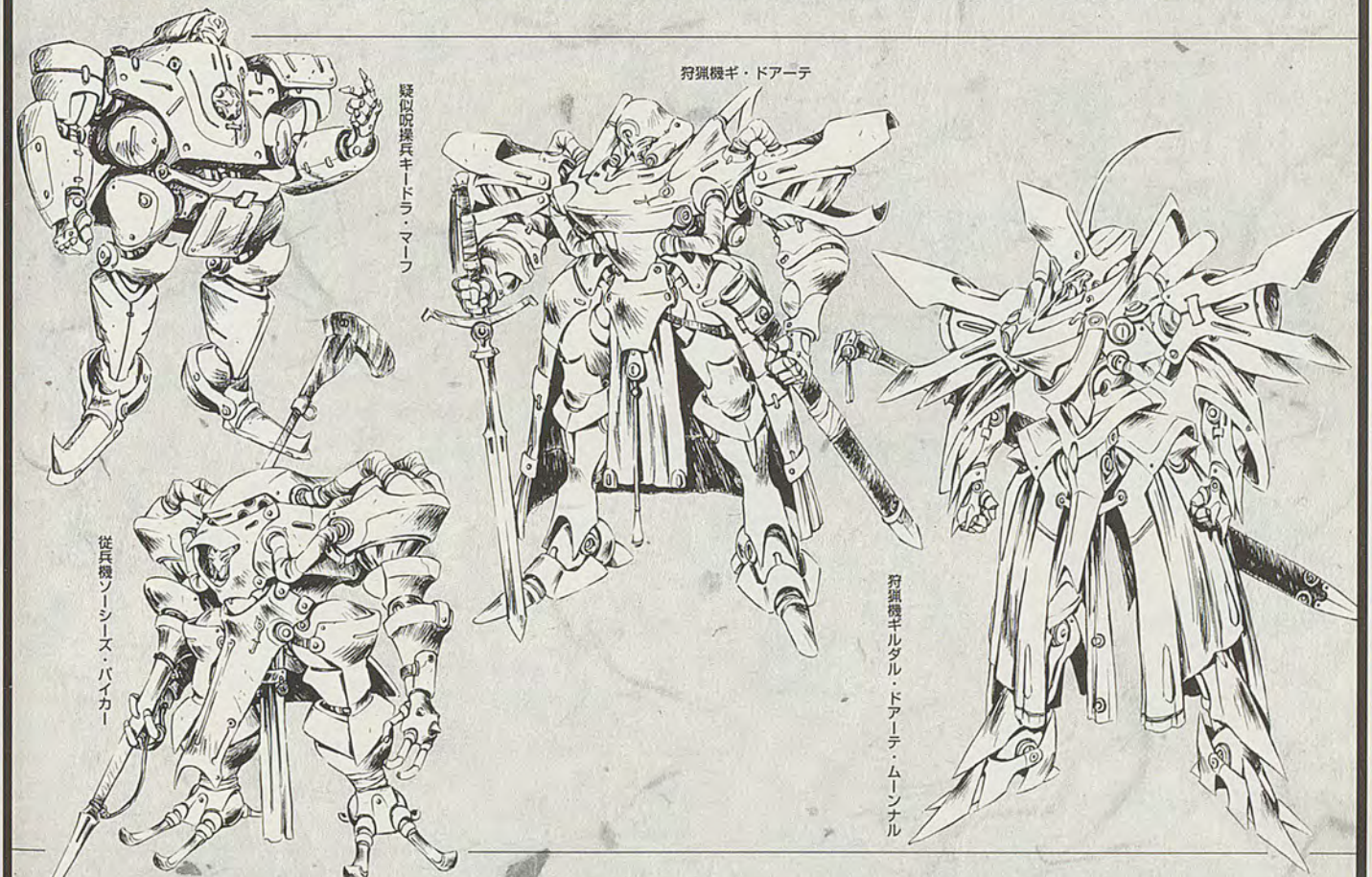
ダカイト・ラズマ帝国は、まったく独自の操兵を用いているが、これは彼らに操兵の製作能力があるわけではなく、工呪会



から引き渡された操兵に独自の改造をくわえているにすぎない。

ドアーテ種と呼ばれる多岐に渡る狩猟機群は、基本的に二種類の機体でしかない。ギ・ドアーテ、そしてムーン・ドアーテであるガッシュ系がその一つで、バイン・ドアーテ、リラーナ・ドアーテと呼ばれる機体がもう一種だが、これらはすべてガッシュ系の亜種でしかない(バイン・ドアーテにいたっては、単に性能にばらつきのあるギ・ドアーテの装甲を換装したものにすぎない)。これは、ギ・ドアーテの設計がいかに優れているかを証明することにもなっている。

ギ・ドアーテは、完全に集団で戦闘を行うための機体である。当時の操兵としては特筆すべき遠隔通信機能を持ち、制御しやすい性能と、訓練された騎士たちともあいまって、戦闘において乱戦に陥る危険を極力排除している。狩猟機には剣という既成概念を打ち破り、複数の機体による密集隊形を組むことができ、長柄の武器(竿状武器)と大型盾を基本装備としたこの機体は、北部の騎士団との戦いにおいて、絶大な威力を発揮した。完全に格上であるはずの列強旗操兵群が、この能力的には並である操兵に敗れ去ったのである。



後に、列強は結束し、ガウア諸国の援助のもとに一度はこの戦法を打ち破るが、数に物を言わせる帝国の前に結局は敗退を余儀なくされるのである(だが、驚くべきことに、メーア・ソードは、このギ・ドアーテの能力を旗操兵級の機体に移植したものだった)。

一方、ムーン・ドアーテは、ギ・ドアーテの逆の発想で作られている。ギ系が性能を意図的に抑え、戦力を整える方向で製作されたのに対して、ムーンは、引き出せる性能を最大限引き出して、非常に高い水準で能力をそろえたのである。操手にも厳選された人間のみを用いることで、非常に高度な集団戦闘を行うことができた。この少数精鋭の操兵集団を目的とした機体、それがムーン・ドアーテである。

ムーンの恐るべき力は、帝国の帝都防衛戦でいかんなく発揮された。数百の狩猟機、従兵機が、わずか数時間の間にたった十二騎のムーン・ドアーテによって敗走させられたのである。

なお、ムーンは、古操兵を下敷きにしたギ系とはまったく別種の操兵であるとも言われている。

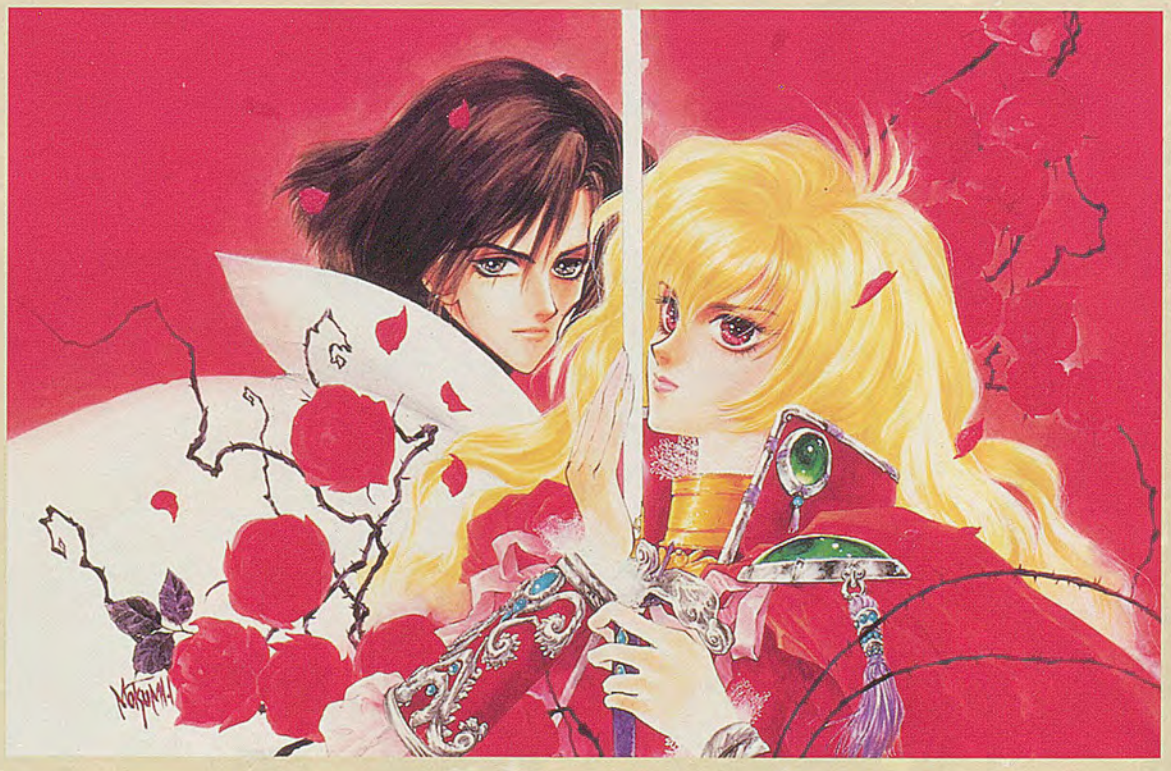
聖刻大全

アバーンの形状すら定まっていなかったはるか昔、太古の時代。その大地は混乱していた。覇業を唱える国々は争い合い、多くの民の血が流された。人々は混乱をおさめる『英雄』や『神』の出現を待ち望んでいた。そして『彼ら』は降臨した。

聖刻太古の時代

混迷の時代

DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐　CDシネマ1
「パリウス起つ」CDジャケット／いのまたむつみ



DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐　CDシネマ2
「運命の出会い」CDジャケット／いのまたむつみ

その昔、アハーン大陸の中原東部を統一していたカンタス王朝。そのカンタスの王の元に、統一の偉業を助けた六人の《将騎士》がいた。

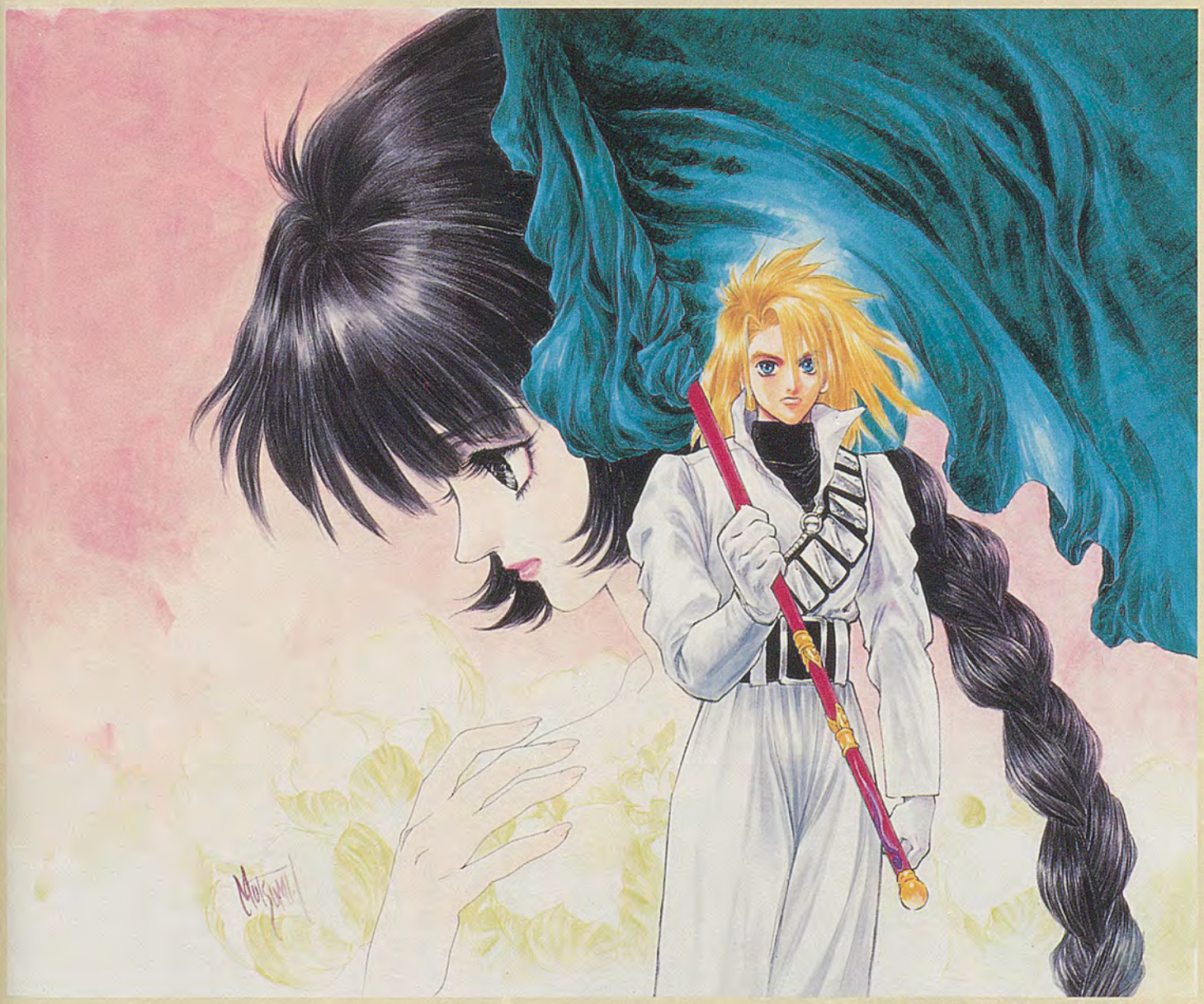
平和を乱す者に敢然と戦いを挑み、悪政に苦しむ弱き者、貧しき者を救ったその《将騎士》たちを、人は「天覇六将・ラシュオーン」と呼んだ。

それから三百年の時が流れ、カンタス王朝の勢力も衰えを見せ始めた。

中原はアリアーシュ、ジェナス、ハバラ、ブランネアール、ゲルトマンド、パライア、ファノーそしてカンタスという八つの国が群雄割拠する混迷の時代を迎えていた。若者たちは伝説の《ラシュオーン》となることを夢見、ある者は名を成すために騎士として国に仕え、ある者は己の野望と夢を叶えるために砂塵の舞う荒野へ旅立っていった。

DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐　CDシネマ3
「ユガの野望」CDジャケット／いのまたむつみ

カンタス暦五九一二年、境で、騎操兵の仮面が発兵バリウスと仮面はそれ



DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐　CDシネマ4
「閃光の騎操兵」CDジャケット／いのまたむつみ

伝説の仮面と騎操兵バリウス

DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐
「オリジナルサウンドトラック」
CDジャケット／いのまたむつみ

カンタス暦五九二年、八国が群雄割拠する中原の情勢も、ここ数年で大きく変貌を遂げつつあった。強大な軍事力を持つハバラの元首モガラ・バクーシが、他国に侵攻を開始したのである。

モガラは、混迷する中原を救うべく《天覇六将》がハバラに降臨するという啓示を受けたとの大義を掲げていた。ハバラはまず、勢力の衰えたかつての盟主カンタスを属国とすると、その他の国にも圧力をかけ始めた。

同じ頃、カンタスの辺境で、騎操兵の仮面が発掘された。通常、騎操兵を制御するために仮面には六十四個の聖刻石が納められているのだが、この仮面には一際大きな六十五個めの聖刻石が納められていたのである。

カンタスはこの仮面を反ハバラ勢力の中では最大の力を持つアリアーシュに託し、ハバラが企む中原制覇の野望を阻止しようとする。

アリアーシュは同盟国のファノーに仮面を装着する最新型の騎操兵の製作を依頼、完成した騎操兵バリウスと仮面はそれぞれファノーとカンタスからアリアーシュへむけて護送されることとなった。

しかし、この情報をハバラが察知しないはずがなかった。ハバラはこの仮面と騎操兵を入手し、なおかつ反逆の意を見せたアリアーシュとファノーを一挙に滅ぼそうと企む。

中原は今再び、戦乱の時代に突入しようとしていた。

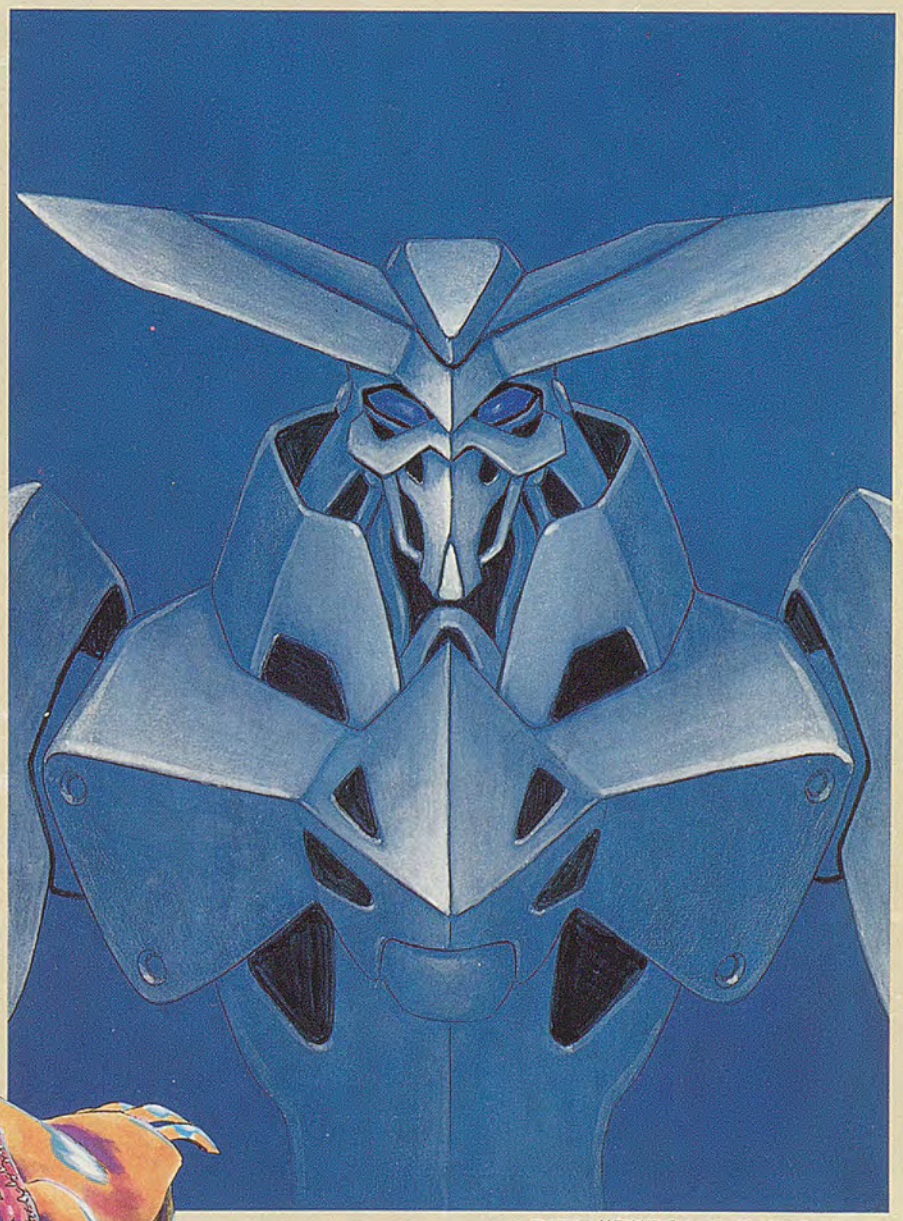
DATA：聖刻覇伝ラシュオーンの嵐　シングルCD
CDジャケット／いのまたむつみ

の時代

それははるかな昔、今は存在していない大陸リグマハーンでの物語。

大陸は神の力を駆使する大帝国によって支配されていた。帝国の名はガウロンドラバス。大陸の諸国を属州とし、武力と圧政によって民衆を統べる恐怖の帝国である。

一方で、この帝国に反旗を翻す国もあった。古の女神を崇める聖なる国ワースティルである。だが、帝国に人質として王女を取られているワースティルは表立った行動が取れず、帝国の圧政に苦しむ他国



DATA：神聖刻記ブリーダーズ・ワース　上
「黄金の神帝国」カバーイラスト／福地　仁

DATA：神聖刻記ブリーダーズ・ワース　上
「黄金の神帝国」カバーイラスト／きむらひでふみ

の同志と共に地下活動を

った。帝国の皇帝は反

神話の

の同志と共に地下活動を続けるにとどまっていた。

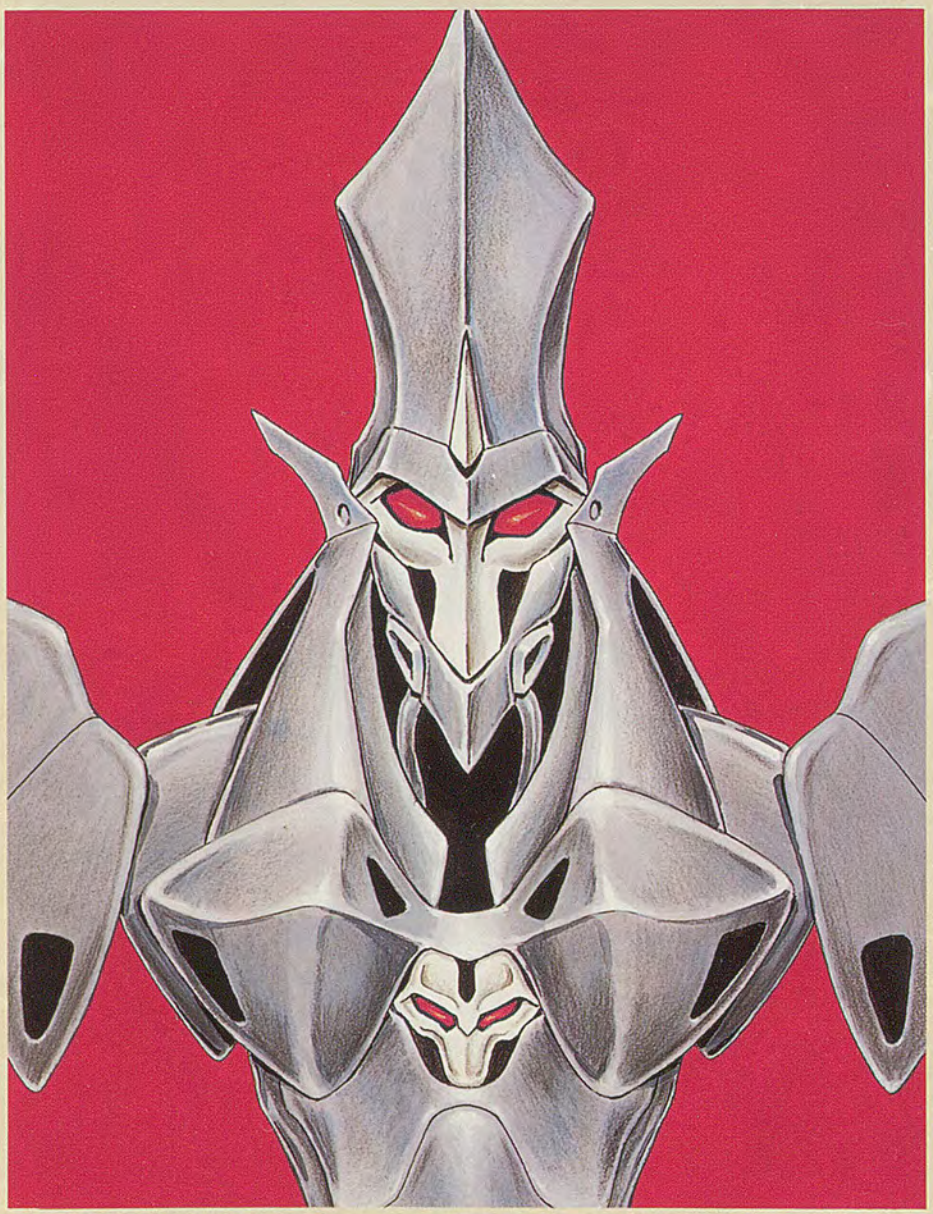
だが、とある因子の介入によって情勢は一変した。一匹狼の盗賊の少年の手によって囚われの王女は解放されたのである。

反帝国軍は勢いづき、帝都へと攻め上っていった。帝国の皇帝は反勢力を一掃するために、神話の時代、世界に恐怖と破壊をもたらした邪神龍を復活させようとする。

熾烈を極めた帝国、反帝国軍の戦いも終局に近づいていた。そしてついには邪神龍が復活する…。

圧政によって民衆を統べ

帝国の圧政に苦しむ他国



DATA：神聖刻記ブリーダーズ・ワース　下
「白銀の聖女神」カバーイラスト／福地 仁

DATA：神聖刻記ブリーダーズ・ワース　下
「白銀の聖女神」カバーイラスト／きむらひでふみ

神聖刻記ブリーダーズ・ワース
企画デザイン集

神聖刻記ブリーダーズ・ワースは、当初RPGゲーム用として始動した企画である。しかし、小説化にあたり設定やキャラクターなど様々な面で大幅な変更が加えられている。ここに掲載されているデザインはゲーム企画時に上げられたものである。

デザイン：きむらひでふみ